

多様な主体の協働に向けた提言（仮称）

～活動を活発化し次のステージへ進むための手がかかり～

（素案）

参 考 資 料

1	調査事例集	1
2	大阪市における主な市民活動推進施策	31

平成 年 月

大阪市市民活動推進審議会

調査事例集

1 個人の担い手が活動をはじめる事例

(1)	NPO法人緑・ふれあいの家（鶴見区緑地域活動協議会）理事長 久木 勝三 氏	3
(2)	平野区瓜破西地域活動協議会 会長 橋本 勝三 氏	4
(3)	淀川区新東三国地域活動協議会 総務部会長 増田 裕子 氏	5
(4)	淀川区三津屋地域活動協議会 会長 泉水 清 氏	6
(5)	特定非営利活動法人コリアNGOセンター 事務局長 金光敏 氏	7
(6)	ふれあいクラブ 代表 竹内 利和 氏	8
(7)	住之江区さざんか平林協議会 副会長 佐野 悦子 氏	9

2 団体の活動が活発化し、連携協働して課題解決に取り組む事例

(1)	地域住民の気づきから、地域活動協議会の取組が生まれた事例 【取組】 地域における子育ての取組 【地域】 鶴見区緑地域 【連携】 地域活動協議会内で取組が生まれた事例	10
(2)	大学から、地域活動協議会に働きかけて連携が生まれた事例 【取組】 アクティブラーニング型災害訓練 【地域】 平野区瓜破西地域 【連携】 大学と地域活動協議会の連携の事例	13
(3)	マンション住民の当事者意識から、地域活動協議会との連携が生まれた事例 【取組】 マンションの防災訓練 【地域】 淀川区新東三国地域 【連携】 マンションの管理組合と町会と地域活動協議会の連携の事例	16
(4)	地域活動協議会から、テーマ型NPOに働きかけて連携が生まれた事例 【取組】 商店街活性化の取組 【地域】 淀川区三津屋地域 【連携】 テーマ型NPOと地域活動協議会の連携の事例	19
(5)	小学校から、テーマ型NPOに働きかけて連携が生まれた事例 【取組】 外国にルーツを持つ方を支援する取組 【地域】 中央区東心斎橋地域 【連携】 小学校とテーマ型NPOの連携の事例	22
(6)	マンション住民が、マンション内外の住民のつながりづくりに取り組む事例 【取組】 ふれあいサロン・ふれあい子ども塾 【地域】 福島区新家地域 【連携】 マンション内外の住民のつながりづくりの事例	25
(7)	地域活動協議会から、企業等に働きかけて連携が生まれた事例 【取組】 ふれあいサロン・ふれあいマルシェ 【地域】 住之江区平林地域 【連携】 企業等と地域活動協議会の連携の事例	28

【参考】

- 個人の担い手が活動をはじめる事例 一覧表
- 団体の活動が活発化し、連携協働して課題解決に取り組む事例 一覧表

(1) NPO法人緑・ふれあいの家(鶴見区緑地域活動協議会) 理事長 久木 勝三 氏	
1)活動をはじめたきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・児童から相談があり小学校の教室に行くと全部の窓ガラスが割れ真冬の中震える手で勉強している状況に驚き、異様に感じたことがきっかけだった。 ・学校だけの責任ではなく、地域の無関心が原因であることを考えて、信頼し合え、協力し合える関係が必要と考え手探りで活動を始めた。
2)活動をはじめめるプロセス	<ul style="list-style-type: none"> ・PTA、子ども会の状況を把握し、学校の授業参観に出向いて現場を確認するとともに、地域からも広くアンケートやヒアリングを半年を掛けて実施した。区役所や教育委員会に相談し、情報を収集し、学校と地域との円卓会議を設定することとした。
3)活動をはじめるときの壁	<ul style="list-style-type: none"> ・地域内では、会計や事業の不透明感と組織運営などで争いも絶えない状況の中、学校も同様で、PTAに入らない保護者や壊滅状態の子ども会などで、現状協力してくれる担い手も無いのが悩みだった。
4)活動をはじめることができた主な要因	<ul style="list-style-type: none"> ・状況改善の契機となったのは、地域でともに立ち上がってくれる仲間が出来た事と、まちづくりセンターが紹介してくれたプロボノチームの協力だった。 ・学校も教頭先生や複数の教員OBの協力も得られ、今回の問題を課題として学校に限定せず、「地域全体」として共有できるようになった。
5)中心的な役割を担うようになった理由	<ul style="list-style-type: none"> ・学校での問題解決に立ち上げたチームが、本質的な地域に点在する課題と向き合う必要があり、その解消のために多岐にわたって活動を始めた事が、発端となった。 ・こうした努力が少しずつ地域に浸透し、他の活動団体を刺激した結果、地域でのコミュニティが復活し団体同士が公平公正に話し会えるようになった。
6)活動を継続する原動力	<ul style="list-style-type: none"> ・活動を継続するためには、活動する拠点と人的資源そして活動の原資が必要となった。そのためには、地域での主体となる団体が公明であり開かれたものでなければ、人的支援を受けることができないため運営会議での公平性を担保し公平に役員を選抜を実施した。 ・事業の継続を図るには補助金や助成金だけでは地域での多様に事業継続を図る事が出来なくなる。そこで、収益事業の獲得を実施した。
7)新しい担い手を増やす働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・学校と地域との円卓会議の設定等、意見交換できる場づくりや、SNS等による情報発信・拡散、また、広報紙も町会加入者だけでなく全戸配布するなどして、現状や課題を共有し、共感を得ながら取組を進めた。 ・実際に取組に従事するスタッフがいないと取組は進まないため、事務局長、計理、事業のスタッフ等の組織づくりを行った。計理には商売をしていた人に担ってもらうなど、適材適所を心がけ、また、無償には限界があることから有償も取り入れた。

(2) 平野区瓜破西地域活動協議会 会長 橋本 勝三 氏	
1)活動をはじめたきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・約35年前、瓜破西地域に引っ越してきた。 ・引っ越した地域は、当初、飛び地として他の町会に含まれていたが、越してきて2年目に、飛び地だけで独立した第5町会をつくってほしいと、連合から頼まれた。
2)活動をはじめめるプロセス	<ul style="list-style-type: none"> ・もともとは、別の人が町会長に就任予定で話を進めていたが、4～5日前に突然、就任予定の方の都合が悪くなり、町会長へ就任する話が持ち上がった。 ・はじめは断ったが、町会を立ち上げてから安定稼働するまでのレールを引く期間となる3年間の約束で、町会長を引き受けた。
3)活動をはじめるときの壁	<ul style="list-style-type: none"> ・町会長を引き受けるにあたって、特に負担に感じることはなかった。 ・当時、第5町会の規模は約90世帯で、戸建ての住宅で構成されていた。 ・町会長を引き受けてから、組織づくりをするために、1軒1軒まわって話をきいた。 ・仕事上の経験から、90世帯の規模をそれほど負担に感じなかったのかもしれない。
4)活動をはじめることができた主な要因	<ul style="list-style-type: none"> ・引っ越してきたタイミングで、新町会を立ち上げることになり、町会長を頼まれた。 ・仕事上の経験から、90世帯の規模をそれほど負担に感じなかった。
5)中心的な役割を担うようになった理由	<ul style="list-style-type: none"> ・第5町会の町会長になって2年目に、連合の総務を頼まれた。 ・総務に就任した当初は、瓜破西地域に来て間もないことや、年も若いことから、様々な意見も受けたが、まずは定款を作成して、年間計画、会計書類、事業報告などの書類を整備し、組織づくりを固めていくうちに、認められるようになっていったと思っている。 ・地域を良くしていくために必要であれば、住民の代表として厳しいことも言わなければいけないと考えている。
6)活動を継続する原動力	<ul style="list-style-type: none"> ・活動を継続する原動力は、使命感だと感じている。 ・安全安心な地域を、自分たちの力で作っていかねばならないという使命感がある。 ・みんなで相談しながら取り組んだことが、良い方向に進んでいく達成感も原動力になっている。
7)新しい担い手を増やす働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい担い手を増やす働きかけとしては、まずは、足を運んで、顔を合わせて、知り合いになることだと思っている。 ・活動者を大切に、若い人も発言しやすい環境になるよう気を配っている。 ・地域活動協議会という組織は、学校やPTA、その他諸団体がともに協働して活動することができるなど、若い人が参画しやすい組織だと感じている。 ・第5町会はマンションが多く、地域活動に協力してもらうためには、住民だけでなく、施主にも、地域活動への理解を深めてもらうよう、マンションの建設時から交流を図っている。

(3) 淀川区新東三国地域活動協議会 総務部会長 増田 裕子 氏	
1)活動をはじめたきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・家族の介護を通じて、電池の取り換えなどで困っている人がいることを知り、お手伝いできることがあることを知った。 ・家族の介護がひと段落し、近隣のお役に立てればと思っていたところに、マンション町会の班長の役が順番でまわってきた。
2)活動をはじめめるプロセス	<ul style="list-style-type: none"> ・マンション町会の班長になるのと同時に、町会の女性部長になった。 ・女性部長として新東三国連合の女性部会で活動することになり、同時に、ネットワーク委員、食事サービス委員に就任し、翌年にはネットワーク推進員になった。
3)活動をはじめるときの壁	<ul style="list-style-type: none"> ・マンション町会は立ち上がったばかりで取組があまりなく、必要な取組を考えてはじめることができたが、連合には取組が多く、所属する町会からの参加者が少なかったことから、取組を考えるよりも参加者集めに追われることになった。
4)活動をはじめることができた主な要因	<ul style="list-style-type: none"> ・家族の看護介護がひと段落して時間ができ、地域のお手伝いをしてもらいたいと考えていたところに、マンション町会の班長の役が順番でまわってきてタイミングがよかった。
5)中心的な役割を担うようになった理由	<ul style="list-style-type: none"> ・マンション町会の役員間で励まし合い、連合の活動を辞めずに続けたことで、連合の役員になっていった。 ・地域活動協議会の立ち上げを任された時は、地域のことが分かっていたことだったので引き受けることができた。
6)活動を継続する原動力	<ul style="list-style-type: none"> ・地域内、淀川区内、そして淀川区外にと、相談できる人が増えていった。 ・同じ立場の人との意見交換は励ましになり、また、地域外の人や違う立場の人との意見交換は新鮮で刺激になる。 ・批判的な人や無関心な人を、振り向かせたいと思う気持ちがやる気につながっている。 ・信じてやらせてくれる人、応援してくれる人がいる。
7)新しい担い手を増やす働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・取組に興味を持った人に集まってもらうため、全戸配布で募集。 ・マンション町会では、防災の取組として、フロア住民で集うフロア会議をとおして顔の見える関係づくりをしており、周知と併せて負担にならない程度に声をかける。 ・何かの役割を担ってもらわなくても、まずは自分ごとに考えてもらえればよいと思って周知・募集している。

(4) 淀川区三津屋地域活動協議会 会長 泉水 清 氏	
1) 活動をはじめたきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・お子さんの体が弱く、外で遊ばせたかったことがきっかけ。 ・お子さんは、キャッチボールや野球に興味を持っていて、地域には町会対抗の野球大会があったが、所属する町会には野球チームがなかった。 ・そこで、自ら回覧板を回し野球をしたい子どもを募ったところ、充分に子どもが集まったので、野球チームを結成。グラウンドを借りて活動を始めた。 ・この活動を見込まれ、初めは町会の子ども会に参加、次に青少年指導員をやらないかと声がかかった。
2) 活動をはじめめるプロセス	<ul style="list-style-type: none"> ・三津屋地域では、大阪市委嘱の青少年指導員の他に、地域委嘱の青少年指導員がいて、全体で50人程度いた。 ・就任当初は、青少年指導員の活動があまり活発でなかったため、かえって事業がやりやすかった。 ・成人式は、青少年指導員の活動としてはじめ、各種団体の参加や寄付も集まる行事になっていった。 ・運動会や夜店事業も青少年指導員の活動としてはじめ、今では、地域社会福祉協議会の事業となっている。
3) 活動をはじめるときの壁	<ul style="list-style-type: none"> ・就任当初、青少年指導員の活動は研修参加とその内容を地域で指導することがメインで、地域行事に関わることがほとんどなかった。そんな中、地域全体での行事が少なかったため、はたちのつどいや運動会、夜店など、地域全体でそれまでなかった事業を新しく企画運営した結果、地域行事に深く関わることができた。
4) 活動をはじめることができた主な要因	<ul style="list-style-type: none"> ・お子さんの体が弱く、外で遊ばせたかったことがきっかけ。 ・お子さんは、キャッチボールや野球に興味を持っていて、地域には町会対抗の野球大会があったが、町会に野球チームがなかったため、自ら作ることにした。 ・地域の人も場所も良く知っていたので、始めることに不安はなかった。
5) 中心的な役割を担うようになった理由	<ul style="list-style-type: none"> ・それまでは地域全体での行事が少なかったが、はたちのつどいや運動会、夜店などの企画を地域の各町会に声かけしたことで、14町会全部が協力してくれるようになり、地域全体の行事として運営することができるようになった。
6) 活動を継続する原動力	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの活動を変えるとき、新しい活動を始めるときには、いろいろな不安要素が出てくるのが当たり前と考えている。 ・準備はしたうえでまずはやってみて、続けるべきものなら改良していくという方法で、前向きに進めている。
7) 新しい担い手を増やす働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・町会の夜店や音楽祭などのイベントへの参加を勧めて、地域の様子を知ってもらい、顔見知りを増やしてもらって、手伝ってもいいなと思えたらスタッフに加わってもらうようにしている。 ・三津屋地域活動協議会の中に、パワーアップ部会という新しい人や団体が入りやすい受け皿を設け、NPOや企業をはじめ幅広く人材や協力団体を募っている。 ・現在、地元企業（約17社）に入ってもらえるよう働きかけを行っており、防災訓練への参加や小学生が社会見学に行くなど、地域の企業に関わる場を増やしていきたい。

(5) 特定非営利活動法人コリアNGOセンター 事務局長 金光敏 氏	
1)活動をはじめたきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・在日コリアン三世として生野区に生まれたことで、幼いころから、課題意識、当事者意識に直面してきた。 ・民族学級の取組に支えられて育ったと感じている。 ・韓国に帰国する経験を経て再び日本に来たとき、知人から、民族学級の運営側として活動しないかと誘われ、活動することとなった。
2)活動をはじめめるプロセス	<ul style="list-style-type: none"> ・民族学級の運営からはじまり、この活動に長く関わった。 ・自分の中からこみあげるものがあり、揮発的な感覚ではなく、自発的な感情で取り組みはじめた。
3)活動をはじめるときの壁	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身は特に壁はなかった。 ・周囲の様子をみると、子育てなどによる家庭環境や経済状況の変化により、民族学級の運営等の活動を離れる人もいる。 ・活動を離れても、保護者としての活動へとスタイルを変えて続けている人もいる。
4)活動をはじめることができた主な要因	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身が民族学級等の取組に支えられて育ったと感じていたので、子どもたちを支えたいという強い思いがあり、タイミングよく知人から運営側として活動しないかと誘われたこと。
5)中心的な役割を担うようになった理由	<ul style="list-style-type: none"> ・民族学級の運営の取組からはじまり、長く関わった。 ・2004年に在日コリアンへの支援を行う3つの団体が統合し、特定非営利活動法人コリアNGOセンターとなったが、統合時のスタッフとして活動を続けた。 ・先輩たちに育ててもらったことが今につながっている。 ・たとえ目立って批判されても、大事だと認識することは最後までやるタイプ（先頭に立って活動することが苦にならない）ということもあるかもしれない。
6)活動を継続する原動力	<ul style="list-style-type: none"> ・当事者なので、この課題から逃げられないという思いや、正面から向き合っていきたいという思いがあり、それが原動力となっている。 ・活動を続けていると、子どもたちの喜ぶ顔が見られることも励みになっている。 ・子どもの成長に関わることができ、自分の子ども時代を取り戻しているような感覚もある。
7)新しい担い手を増やす働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもへの学習支援はボランティアが担っており、ホームページでの募集や、大学に声をかけての募集を行っている。 ・テレビやメディアに取り上げられることで、ボランティアの問い合わせに繋がっている。 ・新しいボランティアに向けたガイダンス、継続ボランティアに向けた指導力・意識向上の研修、支援手法に関する研修等を行っている。 ・ボランティアの中でも、目的を理解し熱心に活動してくれる人には、声をかけて運営側（実行委員会）に加わってもらっている。 ・ボランティアにとっても居場所になっていると思っている。

(6) ふれあいクラブ 代表 竹内 利和 氏	
1)活動をはじめたきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・退職する2年前にマンションに引っ越ししてきた。 ・当初は、地域活動をする予定はなく、管理組合役員を頼まれても断り続けていたが、断り切れなくなって活動をはじめた。 ・役員を続けていたら自治会長を頼まれ、こちらも断り続けていたが、断り切れなくなって引き受けることになった。 ・住民間のコミュニケーションの必要性を感じていた。
2)活動をはじめめるプロセス	<ul style="list-style-type: none"> ・自治会長に就任してから、区の広報で、マンション住民間のコミュニケーションを取る手法について出張講義する取組（福島区主催「マンションと地域の架け橋事業」）を見つけて申し込んだ。 ・講義でふれあいサロンの事例紹介があり、受講した住民の中からやりたいという人が出てきたので、講師の協力を得ながらボランティア組織（ふれあいクラブ）を結成した。 ・ボランティア組織結成にあたっては、熱心にスタッフを集めてくれた人がいて、現在もスタッフのまとめ役となっている。
3)活動をはじめるときの壁	<ul style="list-style-type: none"> ・地域活動をする予定がなかった。 ・住民の高齢化も進む中、住民間のコミュニケーションの必要性を感じていたが、取り組み方が分からなかった。
4)活動をはじめることができた主な要因	<ul style="list-style-type: none"> ・地域活動をする予定がなかったが、熱心に頼まれたこと。 ・住民の高齢化も進む中、住民間のコミュニケーションの必要性を感じていたところ、区の広報で、マンション住民間のコミュニケーションを取る手法について出張講義する取組を見つけたこと。
5)中心的な役割を担うようになった理由	<ul style="list-style-type: none"> ・役員に就任した当初は、できるだけ発言しないようにしていたが、発言した内容が住民に受け入れられたのかもしれない。 ・地域活動はボトムアップの活動と考えており、誰もが自由に意見交換できる環境を心がけている。 ・役員や会長は住民の考えを代表して対外的に発言する役割と思っているので、言いにくいことでも率先して発言するようにしている。（嫌われ役になるところが評価されたのかもしれない。）
6)活動を継続する原動力	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者の楽しむ様子が見られ、住民間のコミュニケーションが生まれる場になっている実感が得られることが、ふれあいサロンスタッフのやる気やチームワークにつながっている。 ・「出来る人が、出来る事を、出来る時に」無理をしないをモットーに、楽しみながら活動できている。
7)新しい担い手を増やす働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・「出来る人が、出来る事を、出来る時に」無理をしないをモットーに、幅広くオープンに取組への参加を呼び掛けている。 ・まちづくりセンターの協力で、取組内容をいろいろな機会に広報することで、大学生の参加が得られたり、同様の取組をしている団体と情報交換する機会が得れている。

(7) 住之江区さざんか平林協議会 副会長 佐野 悦子 氏	
1)活動をはじめたきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの成長に伴い、PTAの役員を頼まれたことがきっかけ。 ・活動をはじめると家族に迷惑をかけると考え、最初は断っていたが、何度も頼まれるうちに、夫が引き受けるよう勧めてくれたことが大きなきっかけとなった。
2)活動をはじめめるプロセス	<ul style="list-style-type: none"> ・PTAで楽しく活動することができ、そこから町会の女性部長を頼まれて引き受けることになった。 ・どのようないきさつで引き受けたのか覚えていないほどなので、負担を感じさせない巧みな勧誘だったのだと思う。
3)活動をはじめるときの壁	<ul style="list-style-type: none"> ・活動をはじめると家族に迷惑をかけると思ったが、家族の理解が得られたので、始めることができた。 ・活動自体は、もともと人と関わることが好きで、ボランティア活動に興味があったこともあり、壁を感じることはなかった。
4)活動をはじめることができた主な要因	<ul style="list-style-type: none"> ・PTAの役員を頼まれたときに、夫や子どもたち家族の理解が得られたことから、活動をはじめることができた。 ・もともと人と関わることが好きで、ボランティア活動に興味があった。
5)中心的な役割を担うようになった理由	<ul style="list-style-type: none"> ・活動を楽しんでいるうちに、気が付いたら、連合の女性部長になり、協議会の副会長になっていた。 ・同じ方向を向いて、一緒に考えることができるスタッフに恵まれており、役を引き受けることが苦にならなかった。 ・協議会の会長が、「失敗を恐れずやればいいと」背中を押してくれる。
6)活動を継続する原動力	<ul style="list-style-type: none"> ・住んでいる地域を、よい地域にしたいという思いを持っている。 ・事業への参加者だけでなく、スタッフも共に楽しみながら活動していることが、活動を継続する原動力になっている。 ・協議会の会長が、スタッフを労ういろいろな企画を提案してくれ、スタッフのチームワークを深める機会になっている。
7)新しい担い手を増やす働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動を楽しんでもらうことを心掛けている。楽しければ、PTAや子ども会の活動だけでなく、地域の活動にも参加してくれると考えている。 ・ボランティア活動に興味を持っているが、どうすればいいかわからない人もいますので、地域にボランティア部も創出した。 ・PTA、子ども会と地域の女性部活動を一緒に行うことで、地域との距離が近くなり、地域の活動にスムーズに加わる流れができてきている。

(1) 地域住民の気づきから、地域活動協議会の取組が生まれた事例

【取組概要】

取組名称	地域における子育ての取組
地域名	鶴見区緑地域
地域概要	<ul style="list-style-type: none"> ・人口総数における、子ども・児童(15歳以下)及び高齢者(特に75歳以上)の増加率が高い状況にある。 ・花博記念公園鶴見緑地があり、広域避難所に指定されている。
地域課題・ニーズ	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の小学校が荒れた時期があった。 ・PTAに入らない保護者も多く、あまり関与しておらず、また子ども会の役員もなり手がいない状態で、学校側も相談できる状況ではなかった。 ・学校側から地域への働きかけもなかったが、地域側から学校への働きかけもなかった。 ・当時の地域状況は、地域課題が山となる中で、運営方針の対立や資金不足による活動不足など大変な状態だった。
参画している主体	<p>鶴見区役所・みどり小学校・緑地域活動協議会 体育・青少年育成部会・鶴見区社会福祉協議会・包括支援センター</p> <p>青少年指導員、青少年福祉委員、体育厚生協会、スポーツ推進委員、振興町会、女性会、子ども会、みどり小学校PTA、広報委員会</p> <p>地域団体(金剛寺)・企業(関目自動車学校)・社会福祉法人(特養みずき会)</p>
取組概要	<ul style="list-style-type: none"> ・PTA、子ども会の状況を把握し、学校の授業参観に出向いて現場を確認するとともに、区役所や教育委員会に相談して情報を収集し、学校と地域との円卓会議を設定して、対策について話し合った。 ・学校を中心としたネットワークを作る必要性を認識し、当時活動が活発だった生涯学習ルーム事業や児童いきいき放課後事業の担い手、青少年指導員を中心に若い人にも参加してもらい、地域にネットワークを構築した。 ・地域の体制がある程度できてから、保護者のニーズや考えを把握するのに、プロボノの力を借りた。プロボノは、地域だけではできない部分を支援してくれた。 ・学校と地域との関わり方を検討した結果、「児童いきいき放課後事業」を地域が受託することの有効性に気づき、検討会を立ち上げ準備をした後、事業を受託した。 ・「児童いきいき放課後事業」の受託を、みどり小学校区だけでなく、鶴見小学校区、茨田西小学校区、横堤小学校区、焼野小学校区に展開した。
取組を行う中での課題	<ul style="list-style-type: none"> ・地域事業の継続性を考えると、究極は補助金がなくても継続できるよう、取組の収支を考えていく必要がある。 ・取組を進める上で課題に直面した際、区役所職員、まちづくりセンター支援員に課題解決へ導くスキルが足りないように感じた。 ・地域には福祉、環境等、施策分野の多岐にわたる課題があるが、行政側の相談窓口は縦割りで、支援体制が横断的でないという問題、支援が計画的でないという問題も感じる。 ・準行政機関である地域活動協議会として活動していくにあたり、地域活動協議会間の横のつながりが薄いことが不便を感じる。区レベル、市レベルのまとまりがなく、区役所や大阪市と連携できる組織体制になっていないと感じる。
中間支援組織のかかわり	<ul style="list-style-type: none"> ・課題に気づいて、区役所や教育委員会に相談した際に、情報を得られたことで、対応策につながった。
行政のかかわり	<ul style="list-style-type: none"> ・区役所(大阪市)が描く地域活動協議会の将来像の方向性は合っていると感じており、そこへ向けての区役所、まちづくりセンターの支援は一定有効と考えている。 ・プロボノの紹介や法人格取得に向けた支援を受けた。

【事例検証】

事例名	地域における子育ての取組
<p>①課題設定のきっかけ</p> <p>(その課題を皆で取組むこととした契機は何か)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の小学校が荒れた時期があり、何とかしなければと思ったことがきっかけ。 ・課題の解決が多岐にわたる為、必然的に多様な地域課題に対処することになった。 ・学校と信頼し合え、協力し合える地域をつくることをめざして、手探りで活動を始めた。
<p>②課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校が荒れた時期に、PTA、子ども会の活動も活発ではなく、学校側も相談できる状況ではなかった。 ・PTAに入らない保護者も多く、また子ども会の役員のなり手がおらず、保護者もあまり関与していない状態だった。 ・学校側から地域への働きかけもなかったが、地域側から学校への働きかけもなかった。
<p>③課題分析</p> <p>(どのような枠組み(メンバー)や方法で分析を行ったか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校と地域との円卓会議を設定して、課題分析や意見交換を行った。 ・PTA、子ども会の状況を把握し、学校の授業参観に出向いて現場を確認するとともに、区役所や教育委員会に相談して情報を収集した。 ・保護者や地域に向けたアンケート、インタビュー等も丁寧に行った。 ・関係者による現状や課題等の情報共有は、上記円卓会議、SNSによる情報発信、広報紙の全戸配布等を使って行い、多くの人に関わってもらうよう工夫した。
<p>④実施主体</p> <p>(課題解決のための実施主体(ステークホルダー)は誰か)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの健全育成に関係する団体を想定し、活動が活発な団体を中心に、活動が活発でない団体の活動を立て直しながら、参画を促した。 ・解決のための課題処理には、地域問題のそのものの解決や支援が必要であったため、主体となった活動が必然的に求められる結果となった。
<p>⑤参画のための仕掛け</p> <p>(主体に参画してもらうための仕掛け(インセンティブ)はどのようなものか)</p>	<p>[情報の発信・共有]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校と地域との円卓会議の設定等、意見交換できる場づくりや、SNS等による情報発信・拡散、また、広報紙も町会加入者だけでなく全戸配布するなどして、現状や課題を共有し、共感を得ながら取組を進めた。 <p>[定年制度の導入]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運営委員会をみんなで話し合える場にし、多くの人や団体が参画しやすくなることを目的に、地域活動に定年制度を導入した。 <p>[組織づくりと参画団体・者の負担軽減]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際に取組に従事するスタッフがいないと取組は進まないため、事務局長、計理、事業のスタッフ等の組織づくりを行った。計理には商売をしていた人に担ってもらうなど、適材適所を心がけ、また、無償には限界があることから有償も取り入れた。 ・スタッフがいることで、担い手には自分のできる範囲の中で参画してもらうことができ、過度な負担感を感じることなく参画できる。
<p>⑥当事者意識の触発</p> <p>(どういった活動が当事者意識を触発していくのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・課題の共有、情報の共有を丁寧に行い、関係者の共感を得ながら進めていく。 ・課題解決のためには共有した情報をテーブルに乗せて全体が当事者である事を認識する。

<p>⑦課題解決のための事業</p> <p>(課題解決のためにどのような事業を実施するか また、そのプロセス)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校と地域との関わり方を検討した結果、「児童いきいき放課後事業」を地域が受託することの有効性に気づき、事業を受託した。 ・地域情報が住民に広く広報する必要がある為、広報委員会を立ち上げて、広報誌・HP・ブログ・FBなどの多様なツールを使い、こまめな情報の発信をした。
<p>⑧連携協働の契機(触媒)</p> <p>(事例のどのようなプロセスが協働連携を進めさせる重要なチャンス、場づくり、手助けに なったりしているのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校と地域との円卓会議の設定等、意見交換できる場づくりや、SNS等による情報発信・拡散、また、広報紙も町会加入者だけでなく全戸配布するなどして、現状や課題を共有し、共感を得ながら取組を進めた。 また集会や会議などの出欠もメール等で適時に発信できるよう改善して、協働した活動としての認識をえた。
<p>⑨リソースシェアリング</p> <p>(必要な資源のシェアリングのためにどのような働きかけを行い、どうい協力の関係ができて いるのか(オーバーラップ))</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校や区役所から、具体的な場所の提供を受けている。
<p>⑩地域協働の手がかり</p> <p>(それぞれの主体がどういところを手がかりにして今後の地域協働を進めていけばいい のか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・取組を中心的に行うスタッフがいることで、担い手には自分のできる範囲の中 で参画してもらうことができ、過度な負担感を感じることなく参画できる。
<p>⑪協働が成果を生み出す要因</p> <p>(具体的な協働というのが成果を生み出すことができるよう なものがどうやったら生まれてくるのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの健全育成に、学校だけで取組むのではなく、地域、保護者等のあらゆる関係者が連携して取り組むことで、子どもを見守る層が厚くなり、より効果的なものとなる。子どもを中心としたJr.防災リーダーの養成講座やはぐくみ事業での活動を地域連携で実施するなど学校を核とした活動が地域コミュニティの原型であることが住民に認識された。
<p>⑫今後の課題</p> <p>(今後取組を進めて行くにあ たっての課題はなにか 必要なことはなにか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・取組を中心的に行うスタッフがいることで、担い手には自分のできる範囲の中 で参画してもらうことができ、過度な負担感を感じることなく参画できる。 ・地域活動協議会間の連携や情報共有を行うことで、いろいろな課題解決の取組が進むと考える。

(2) 大学から、地域活動協議会に働きかけて連携が生まれた事例

【取組概要】

取組名称	アクティブラーニング型災害訓練
地域名	平野区瓜破西地域
地域概要	大和川に隣接する地域
地域課題・ニーズ	<p>[地域課題] 大和川増水時に地震が発生すると堤防が一部破損するなどし、河川氾濫の危険性がある。 災害訓練への参加者が少ない。 住民に高齢者が多い。</p> <p>[ニーズ] ①防災力を高めること ②地域防災リーダーとなる人材を育成すること</p>
参画している主体	大阪市立大学都市防災教育研究センター、瓜破西地域活動協議会、介護付き有料老人ホームひだまりの家、瓜破水防分団、平野区役所、平野消防署、平野工営所、瓜破霊園、および瓜破西地域の住民の皆さま、瓜破西中学校の保護者の皆さま・教職員の皆さま
取組概要	<p>大阪市立大学都市防災教育研究センターが地域と連携して行う「コミュニティ防災教室」の取組の一つである、「地域防災リーダー育成プログラム アクティブラーニング型災害訓練『すごい災害訓練DECO (Disaster Evacuation Coaching) 』」を、平野区瓜破西地域において実施しました。</p> <p>この災害訓練は、自分が暮らしている地域で想定される災害を認識するとともに、基礎的な応急処置や災害時における対応、リーダーシップ、地域コミュニティの状況の把握、などの体験を通じて防災に関する理解を深め、被災時に自ら考え、自助・共助を実践できる力を身に付けることを目指しています。</p> <p>平野区瓜破西地域において、大和川増水時に発生した地震で堤防が一部破損し、河川氾濫の危険性があるという事態を想定したシナリオのもと実施し、大阪市立瓜破西中学校の生徒14名が2班に分かれて参加しました。行き先や解決すべき課題が携行するタブレット端末にリアルタイムにすべて通知され、災害本部とのやりとりや課題をクリアした際の報告も全てタブレット端末を使用して行いました。また、SNSを活用し随時状況報告をすることで、情報共有の大切さも学ぶことができました。</p> <p>訓練後のふりかえり学習では、タブレット端末の位置情報を利用して記録した各グループの避難経路や負傷者の応急手当、訪問施設の災害対応情報について検証するとともに、実際に訓練に参加してみて感じたことや、反省点などの発表も行いました。</p>
取組を行う中での課題	<ul style="list-style-type: none"> ・災害を想定しながら行動シナリオを作成する作業が、防災力を高めることに役立つのだが、このシナリオ作成に地域の方にあまり参加いただけなかった。 ・この取組への参加団体を集めるにあたり、区役所がコーディネイト役となり、地域が中心となつての声掛けとはならなかった。
中間支援組織からの支援内容	<ul style="list-style-type: none"> ・この取組への参加団体を集めるにあたり、大学が相談を持ち掛けたこともあり、区役所がコーディネイト役となった。
行政からの支援内容	

【事例検証】

事例名	アクティブラーニング型災害訓練
<p>①課題設定のきっかけ</p> <p>(その課題を皆で取組むこととした契機は何か)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪市立大学都市防災教育研究センターのメインテーマである。 ・大和川に隣接する地域に居住している市民にとって、防災は関心の高い課題であると考え、この地域に声をかけた。
<p>②課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大和川増水時に地震が発生すると堤防が一部破損するなどし、河川氾濫の危険性がある。 ・災害訓練への参加者が少ない。 ・住民に高齢者が多い。
<p>③課題分析</p> <p>(どのような枠組み(メンバー)や方法で分析を行ったか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪市立大学都市防災教育研究センターの防災教育プログラムの一つとして、大学中心で実施した。 ・災害を想定しながら行動シナリオを作成する作業が、防災力を高めることに役立つのだが、このシナリオ作成に地域の方にあまり参加いただけなかった。
<p>④実施主体</p> <p>(課題解決のための実施主体(ステークホルダー)は誰か)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・災害時の行動を検討し、関係しそうな団体や施設を考える→地活協、区役所、消防、福祉施設 ・今後参画してほしい主体: 地下鉄、医療機関、警察、災害時協力企業への登録企業、区社会福祉協議会(災害ボランティアセンター)等 ・中学生を主体にする(今後地域を支えていく可能性がある中学生にリーダーシップを持ってもらう)
<p>⑤参画のための仕掛け</p> <p>(主体に参画してもらうための仕掛け(インセンティブ)はどのようなものがいいか)</p>	<p>対象:個人、団体</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生を主体とすることで、見守りの観点から地活協など多くの人が参加してくれた。 ・「災害訓練の中で中学生が立ち寄る施設となる」など、役割を決めることで、参加のハードルを下げた。 <p>対象:個人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タブレットを使い、まちをフィールドにしたゲームという形で、中学生が楽しみながら能動的に訓練ができるようにしている。
<p>⑥当事者意識の触発</p> <p>(どういう活動が当事者意識を触発していくのか)</p>	<p>[参画団体の当事者意識の触発]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・災害の内容や被害状況を想定し、災害時の行動を検討するという過程を経る。 ・中学生を主体とした防災訓練とすることで、地域の大人の協力が得やすくなる。 <p>[中学生の当事者意識の触発]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・訓練の準備として、まち歩きをする。 ・中学生が普段行かない施設に行ってもらい、いろいろなミッションをこなしてもらうことにより、気づきのきっかけを入れている。(救命講習、マンホールトイレの設置)

<p>⑦課題解決のための事業</p> <p>(課題解決のためにどのような事業を実施するか また、そのプロセス)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・災害の内容や被害状況を想定し、災害時の行動を検討のうえ実際に訓練するという手法の防災訓練 ・中学生を主体とした防災訓練
<p>⑧連携協働の契機(触媒)</p> <p>(事例のどのようなプロセスが協働連携を進めさせる重要なチャンス、場づくり、手助けに なったりしているのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生が訪れる施設になってもらうことによって、多様な主体に防災訓練に参加してもらい、今後の地域防災を考えるうえでの連携が生まれるきっかけにしようとした。
<p>⑨リソースシェアリング</p> <p>(必要な資源のシェアリングのためにどのような働きかけを行い、どうい う協力の関係ができて いるのか(オーバーラップ))</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・区役所が中心になって各団体に声をかけた。
<p>⑩地域協働の手がかり</p> <p>(それぞれの主体がどうい うところを手がかりにして今後の地域協働を進めていけばいい のか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・防災をテーマにすると地域や関係機関の共感・協力が得やすい。 ・中学生を主体とした防災訓練とすることで、地域の大人の協力が得やすくなる。 ・アクティブラーニング等の工夫で、楽しく参加できるようになる。 ・参画団体の役割を軽くすると、参加(関わり)のハードルが下がる。
<p>⑪協働が成果を生み出す要因</p> <p>(具体的な協働というのが成果を生み出すことができるよ うなものがどうやったら生まれてくるのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・訓練の主体である中学生が興味を持つ、楽しいと感じるプログラムを作る(タブレットの活用、訪問施設の選定とそこで体験する内容(ミッション)) ・中学生を訓練者とするこ とで、周りの人をサポートさせたい気持ちにさせている。
<p>⑫今後の課題</p> <p>(今後取組を進めて行くにあ たったの課題はなにか 必要なことはなにか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今回は大学の働きかけであるが、地域が主体の防災の取組になっていく必要がある。

(3) マンション住民の当事者意識から、地域活動協議会との連携が生まれた事例

【取組概要】

取組名称	マンションの防災訓練
地域名	淀川区新東三国地域
地域概要	<ul style="list-style-type: none"> ・マンション町会は、ほぼ同じような水準、価値観の世帯が集まっているので、まとまりやすい、一方、特に賃貸の住民については流動的で、組織に定着しにくいといえる。 ・町会はマンション2棟で構成され、約450世帯約600人
地域課題・ニーズ	<ul style="list-style-type: none"> ・マンションに自主防災組織が、まだ組織されていなかった。 ・防災訓練の内容では、実際の災害時にマンション住民が安全に避難できる状況とはいえなかった。
参加している主体	マンション町会、マンション管理組合、小学校
取組概要	<ul style="list-style-type: none"> ・防災訓練に先立ち、防災訓練の目的や訓練の内容について住民自身で考える場を持った。 ・防災訓練の目的は「自分、家族、隣人の命を守ること」であることを確認した。 ・災害時には、災害本部の無線が小学校区の命綱であり、マンションに留まる選択肢もあるが、その場合でも、怪我人の状況、マンションの破損箇所や程度等を、災害本部に報告し、情報を共有しておく必要があるということを確認した。 ・訓練内容に、ただ避難するだけでなく、自分と家族の安否確認だけでなく、両隣の安否確認をしてから避難するルールを加え、自治会が配布している無事を示すプレートの家の前に出すこととした。 ・防災訓練の際には、家族の無事を示すプレートを家の前に出す形で防災訓練に参加した住民が、400世帯中164世帯、小学校に避難して行う防災訓練には82名が集まり、例年より多くの参加を得ることができた。 ・防災訓練を通して災害時の避難行動について具体的な検討が進み、今後の防災の取組については、マンションの管理組合と自治会との合同の自主防災組織で運営していくこととなった。
取組を行う中での課題	<ul style="list-style-type: none"> ・防災訓練への参加者が少ない。 ・小学校を避難場所としている必要性の理解が浸透していない。 ・マンションの住民には分譲と賃貸があり、特に賃貸の住民は流動的で、組織に定着しにくい。
中間支援組織のかかわり	
行政のかかわり	

【事例検証】

事例名	マンションの防災訓練
<p>①課題設定のきっかけ</p> <p>(その課題を皆で取り組むこととした契機は何か)</p>	<p>・マンション管理組合の理事長とマンション町会の会長が同じ思いで、マンションに合同の自主防災組織を作りたいという熱意があった。</p>
<p>②課題</p>	<p>・マンションに自主防災組織が、まだ組織されていなかった。 ・防災訓練の内容では、実際の災害時にマンション住民が安全に避難できる状況とはいえなかった。</p>
<p>③課題分析</p> <p>(どのような枠組み(メンバー)や方法で分析を行ったか)</p>	<p>・管理組合と町会合同で自主防災組織を作ることをめざし、準備委員会を立ち上げた。 ・両組織の毎月全戸配布の議事録と一緒に、準備委員会の参加者や、自主防災組織の隊員を募集した。 ・防災訓練に先立ち、防災訓練の目的を再確認し、災害時の避難行動について住民自身で考える打合せの場を持った。</p>
<p>④実施主体</p> <p>(課題解決のための実施主体(ステークホルダー)は誰か)</p>	<p>・マンション住民が災害時に安全に避難するために連携すべき主体を検討(マンションの住民、マンションの管理組合、小学校、地域の自主防災組織、地域の災害本部など)</p>
<p>⑤参画のための仕掛け</p> <p>(主体に参画してもらうための仕掛け(インセンティブ)はどのようなものがあるか)</p>	<p>対象:個人 【スタッフの場合】 ・会議への出席についても、メールで情報を共有できればよいことにし、時間の都合のつきにくい人でも参加しやすくした。 ・ポスター作成が得意ならポスターだけ等、活動内容の希望にも応じて参加しやすくした。</p> <p>【参加者の場合】 ・両隣やフロアで助け合うことを基本に、フロア会議を開くことを促した。 ・顔の見える関係をつくると、隣人の高齢者、障がい者、要支援者をお互いに知ることができ、両隣で助け合って避難することができるようになった。 ・防災訓練に先立ち、防災訓練の目的や災害時の避難行動について住民自身で考える場を持ち、訓練内容を検討したことで、防災への意識が高まった。 ・全戸配布している安否確認のプレートを使って、家族の安否を隣人に知らせる参加、両隣の安否をプレートで確認してマンションの1階まで避難する参加、そのまま小学校まで避難して小学校での訓練も受ける参加と、参加の段階を作り、住民の都合に合わせた参加ができるようにし、小学校まで避難した人には、防災食が食べられるという楽しい要素(訓練)を用意した。 ・災害発生時に自宅にいない家族もいる。その場合、家族の時間帯ごとの居場所を把握しておき、それを災害対策本部に報告することで、安否確認の精度が格段に上がるという情報を共有し、家族の居場所を把握することを促した。 ・参加を促すために、日頃から挨拶をすること、また、エレベーターで会ったときには防災訓練のポスターを指しながら、「来てください」と声をかけることを心がけた。</p>
<p>⑥当事者意識の触発</p> <p>(どのような活動が当事者意識を触発していくのか)</p>	<p>【参加者の場合】 ・防災訓練に先立ち、防災訓練の目的や災害時の避難行動について住民自身で考える場を持ち、訓練内容を検討したことで、防災への意識が高まった。</p>

<p>⑦課題解決のための事業</p> <p>(課題解決のためにどのような事業を実施するか また、そのプロセス)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・隣人の状況を理解し合う目的で、日頃からフロア会議を行う。 ・両隣の住民の安否を確認したうえで、避難場所である小学校まで避難するという防災訓練
<p>⑧連携協働の契機(触媒)</p> <p>(事例のどのようなプロセスが協働連携を進めさせる重要なチャンス、場づくり、手助けになったりしているのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・マンション管理組合の理事長とマンション町会の会長が同じ人で、マンションに合同の自主防災組織を作りたいという熱意があった。 ・防災訓練を通して、実際の災害時にはマンション住民だけで避難するより、地域の災害対策本部等と連携した方が助かる率が高くなることに住民が気が付いた。
<p>⑨リソースシェアリング</p> <p>(必要な資源のシェアリングのためにどのような働きかけを行い、どのような協力の関係ができてきているのか(オーバーラップ))</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の自主防災組織、災害本部と連携して取り組むことで、災害時の被害状況や適切な避難行動等について情報共有ができる。
<p>⑩地域協働の手がかり</p> <p>(それぞれの主体がどういふところを手がかりにして今後の地域協働を進めていけばいいのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・防災訓練を通して、実際の災害時にはマンション住民だけで避難するより、地域の災害対策本部等と連携した方が助かる率が高くなることに住民が気が付いた。
<p>⑪協働が成果を生み出す要因</p> <p>(具体的な協働というのが成果を生み出すことができるようなものがどうやったら生まれてくるのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの住民の参加を得て防災訓練をすることで、いろいろな工夫や気づきが生まれている。 ・防災訓練を、マンション住民だけでなく、地域と連携して行うことで、実際の災害時に安全に避難できる可能性が高まる。
<p>⑫今後の課題</p> <p>(今後取組を進めて行くにあたっての課題はなにか必要なことはなにか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・災害対策本部であり、避難場所である小学校を中心とした防災訓練につなげていく際には、小学校下で組織される地域活動協議会とも連携し、連合の11町会とも連携した取り組みになっていくことが大切と考える。 ・小学校と新東三国地域の連携として、災害時に学校にいる子どもを地域の大人に引き渡す防災訓練も始めており、より充実させていきたいと考えている。 ・小学校を中心に取組むことで、町会間の壁がなくなり、地域活動協議会(連合)として一体的になれると直感的に感じている。

(4) 地域活動協議会から、テーマ型NPOに働きかけて連携が生まれた事例

【取組概要】

取組名称	商店街活性化の取組(三津屋音楽祭)
地域名	淀川区三津屋地域
地域概要	<ul style="list-style-type: none"> ・阪急神戸線「神崎川駅」の西側に位置しており、駅前の南側には三津屋商店街があり、昔ながらの懐かしい町並みを残す地域 ・現在、駅前に大規模マンション(完成時総戸数745戸)の建設が進んでおり、完成した住居棟では入居が始まっている。
地域課題・ニーズ	<ul style="list-style-type: none"> ・商店街の活性化 ・住民同士のつながり、顔の見える関係づくり ・駅前マンション住民といった新しい住民にも地域に関心を持ってほしい。 ・次世代を担う子どもたちの地域への愛着を育む。
参画している主体	<p>三津屋音楽祭実行委員会メンバー【第1回三津屋音楽祭(2011年)】</p> <p>三津屋地域振興連合町会、三津屋商店街振興組合、三津屋連合子ども会、演奏家(アンサンブル・ギリビッツォのメンバー、琴演奏家、大阪市職教育支部音楽団分会、大阪市音楽団のメンバー)、みつや交流亭(特定非営利活動法人みつや交流亭、子育てサークル「育児&育自 この指と〜まれ!」、NPO法人もみじ(国際交流)、落語家、タウン誌『ザ・淀川』編集長、大阪市職員労働組合)</p>
取組概要	<ul style="list-style-type: none"> ・三津屋生まれ三津屋育ちのアマチュア演奏家の方を中心に、所属する室内楽団「アンサンブル・ギリビッツォ」、大阪市音楽団の有志、三津屋連合子ども会の音楽クラブをはじめ、多くの演奏者が参加して音楽祭を開催。 ・地域、商店街、NPO、自治体労働組合と様々な立場からアイデアを出し、議論した結果、商店街アーケード下を1日限りの劇場に見立て、その各所で演奏を行い、商店街の北から南へ観客が順番に会場を移動していくという、ユニークなスタイルで実施。 ・音楽祭の会場を、三津屋地域の駅前や商店街といった人通りの多い場所を中心にまちなかに8カ所設け、駅前広場から商店街が隣接しているといった立地を有効活用し、それぞれの会場で楽しそうな音楽を奏でることで、人々の関心を広く集めることをめざす。
取組を行う中での課題	
中間支援組織のかかわり	
行政のかかわり	

【事例検証】

事例名	三津屋音楽祭
<p>①課題設定のきっかけ (その課題を皆で取組むこととした契機は何か)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2010年、三津屋商店街で、三津屋生まれのアマチュア演奏家の方が「音楽で地域、とりわけ商店街に貢献できないか」と相談し、「何か面白いことが実現できる場所」として「みつや交流亭」を紹介されて訪れたことがきっかけ。 ・商店街の集客が減少する中で、イベントが慢性化していることに商店街も問題意識をもっていた。
<p>②課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・商店街の活性化 ・住民同士のつながり、顔の見える関係づくり ・駅前マンション住民といった新しい住民にも地域に関心を持ってほしい ・次世代を担う子どもたちの地域への愛着を育む ・住民同士のつながりや地域への愛着、商店街の活性化を実現する手法として「音楽の力」に着目
<p>③課題分析 (どのような枠組み(メンバー)や方法で分析を行ったか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・みつや交流亭のネットワークを通じて、実行委員会を立ち上げる。 ・実行委員会には地域、商店街、みつや交流亭、演奏者と多彩なメンバーが参加。 ・委員長には地元連合町会会長になっていただき、大阪市音楽団からも団員が参加することとなった。
<p>④実施主体 (課題解決のための実施主体(ステークホルダー)は誰か)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽で地域や商店街に貢献することに共感する人、団体 ・具体的には、連合町会(地域活動協議会)、商店街振興組合、子ども会、演奏家、みつや交流亭など
<p>⑤参画のための仕掛け (主体に参画してもらうための仕掛け(インセンティブ)はどのようなものか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・商店街を舞台にすることで、商店街また三津屋地域の活性化につながることから、商店街の店舗、三津屋地域の各種団体から協力が得られた。 ・ユニークな取組なので、回を重ねるごとに関わりたいという演奏者、スタッフ、協賛者が増えている。
<p>⑥当事者意識の触発 (どういう活動が当事者意識を触発していくのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフにも参加者にも楽しんでもらうこと

<p>⑦課題解決のための事業</p> <p>(課題解決のためにどのような事業を実施するか また、そのプロセス)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽祭 ・商店街アーケード下を1日限りの劇場に見立て、その各所で演奏を行い、商店街の北から南へ観客が順番に会場を移動していくという、ユニークなスタイルで実施
<p>⑧連携協働の契機(触媒)</p> <p>(事例のどのようなプロセスが協働連携を進めさせる重要なチャンス、場づくり、手助けに なったりしているのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーターの活躍 <p>タウン誌の編集長がキーパーソンとなり、幅広い人脈から取組に協力してくれる方を集めて、基礎を築いた「みつや交流亭」という交流の場があることで、連携が生まれやすくなっている。</p>
<p>⑨リソースシェアリング</p> <p>(必要な資源のシェアリングのためにどのような働きかけを行い、どういった協力の関係ができているのか(オーバーラップ))</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・初めての取組で、行動様式も考え方も異なる団体と連携しての取組なので、いろいろなアイデアや議論の要素や不安要素は出てくるが、実行委員長やコーディネーターが、話し合いながらとにかく前へ進め、やってみようという方向に持っていった。
<p>⑩地域協働の手がかり</p> <p>(それぞれの主体がどういったところを手がかりにして今後の地域協働を進めていけばいいのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・三津屋地域には、駅前に大型マンションの建設計画があり、土壌問題や地区計画などの検討のために地域住民が集まって話し合うことが10年以上続いたこともあって、住民の間に、集まって話し合いができる状態ができていた。 ・商店街再生や地域活性化をめざす「みつや交流亭」という、幅広いネットワークを持つ団体が地域に存在したため、多様な団体のコーディネートが生まれやすい。
<p>⑪協働が成果を生み出す要因</p> <p>(具体的な協働というのが成果を生み出すことができるようなものがどうやったら生まれてくるのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域、商店街、NPO、自治体労働組合と幅広く連携することで、演奏技術、企画力などのスキルをはじめ、様々な立場からのアイデアを得ることができ、ユニークなスタイルの事業を行うことができた。
<p>⑫今後の課題</p> <p>(今後取組を進めて行くにあたっての課題はなにか 必要なことはなにか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大型マンションが2棟(合計約700戸)、平成29年10月に立ち上がり、新しい住民が加わることになる。 ・今後は、音楽祭の取組においても、新しい住民と地域住民との交流のきっかけとなることを視野に入れていきたい。

(5) 小学校から、テーマ型NPOに働きかけて連携が生まれた事例

【取組概要】

取組名称	外国にルーツを持つ方を支援する取組 (Minamiこども教室)
地域名	中央区東心斎橋地域
地域概要	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪市は全国の政令指定都市の中で、人口に占める外国人登録者数の比率が4.59%と最も高い。 ・とりわけ中央区は域内に日本有数の繁華街がある関係上、外国人登録者数増加率は1.21%と大阪市内で最も高い。
地域課題・ニーズ	<ul style="list-style-type: none"> ・中央区内の小学校には15ヵ国以上の子どもたちが在籍し、その中には、日本語での学習に困難を抱えたり、仕事が忙しい保護者との時間が持てず、一人で過ごすケースが多くみられる。
参画している主体	特定非営利活動法人コリアNGOセンター、こどもひろば、特定非営利活動法人多文化共生センター大阪、大阪市立南小学校、公益財団法人大阪国際交流センター、特定非営利活動法人関西国際交流団体協議会、日本語教育経験者、教員経験者、大阪大学未来戦略機構
取組概要	<p><放課後学習教室の実施></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校の宿題のほか、日本語の基礎的な学習を行う学習支援と、子どもの放課後、夜間の居場所づくりを目的として実施している。 ・対象は、中央区在住の小学1年生～6年生及び継続参加の中学生 ・中央区に在住の外国にルーツを持つ児童50名(フィリピン、タイ、インド、中国、ブラジル等)、ボランティア登録人数:78名(実行委員含む)(2017年1月現在) <p><学習支援ボランティアの募集と育成></p> <ul style="list-style-type: none"> ・新たな学習支援ボランティアの募集と、新しいボランティアに向けたガイダンス、継続ボランティアに向けた指導力・意識向上の研修、支援手法に関する研修等を行っている。 <p><課外学習の実施></p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象の子どもたちは、ひとり親家庭が多くをしめ、生活を支えるために保護者が割高な夜間就労やダブル、トリプルワークで忙しく、休日に外出やアクティビティをする機会が少ないなどが見られ、子どもたちの社会教育・活動の場として特別学習などを実施している。 <p><保護者・家庭への参加呼びかけ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの背景となる家庭との連携を図っていくことも重要視しており、子どもの状況、家庭環境に応じた支援に向け、学校の懇談会、教室への送迎、訪問等で保護者への聞き取りの機会を設け、課題把握や連携を図っている。
取組を行う中での課題	<p>支援体制の拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの数に対してボランティアが不足、受け入れ場所の不足、資金面の安定 <p>学習指導内容の質の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの日本語力向上や学力向上につながっているか効果を評価していくことが必要
中間支援組織のかかわり	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪府が実施する「新しい公共支援事業」という助成事業を活用して、関西国際交流団体協議会が外国人母子支援をテーマにしたネットワークを形成しており、ステークホルダーが集まっていたことが、きっかけのひとつになっている。
行政のかかわり	<ul style="list-style-type: none"> ・関西国際交流団体協議会はボランティア募集や資金集めに協力しており、ファンドや助成事業を探し、資金面の支援を得ている。 ・中央区の子ども子育てプラザの事業としても位置付けてもらい、場所の使用面で優先してもらっている。

【事例検証】	
事例名	Minamiこども教室
①課題設定のきっかけ <small>(その課題を皆で取組むこととした契機は何か)</small>	<ul style="list-style-type: none"> ・2012年に、関西国際交流団体協議会が、「マーテル外国人母子支援ネットワーク形成事業」(大阪府新しい公共支援事業)として、外国人母子支援のあり方をテーマに外国人支援を行う団体のネットワークを形成しており、ステークホルダーが集まる場所があった。(登録団体数60団体) ・2012年4月に、中央区でフィリピン人女性による実子刺殺自殺未遂事件が起き、大阪市立南小学校校長が、いろいろな集まりで協力を求める中、このネットワークにも参加して協力を求めた。
②課題	<ul style="list-style-type: none"> ・中央区内の小学校には15ヵ国以上の子どもたちが在籍し、その中には、日本語での学習に困難を抱えたり、仕事が忙しい保護者との時間が持てず、一人で過ごすケースが多くみられる。
③課題分析 <small>(どのような枠組み(メンバー)や方法で分析を行ったか)</small>	<ul style="list-style-type: none"> ・「外国人母子支援のためのネットワーク」に参加していた団体や個人を中心に、はじめから多くの団体で課題分析を行い、課題解決策について話し合うことができた。 ・参加団体の特性である、ソーシャルワークの視点と、学習支援の視点では、意見が異なる部分もあり、取組の目的や、めざす効果について、深く話し合った。
④実施主体 <small>(課題解決のための実施主体(ステークホルダー)は誰か)</small>	<ul style="list-style-type: none"> ・2012年に、関西国際交流団体協議会が、「外国人母子支援のためのネットワーク」を形成しており、ステークホルダーが集まっていた。
⑤参画のための仕掛け <small>(主体に参画してもらうための仕掛け(インセンティブ)はどのようなものか)</small>	<p>対象:団体</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2012年に、関西国際交流団体協議会が、「外国人母子支援のためのネットワーク」を形成しており、ステークホルダーが集まっていた。 <p>対象:個人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもへの学習支援はボランティアが担っており、ホームページでの募集や、大学に声をかけての募集を行っている。
⑥当事者意識の触発 <small>(どのような活動が当事者意識を触発していくのか)</small>	<p>【団体】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実行委員会形式とし、それぞれの団体の特性を活かした役割分担をした。 <p>【ボランティア】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新しいボランティアに向けたガイダンス、継続ボランティアに向けた指導力・意識向上の研修、支援手法に関する研修等を行っている。 ・ボランティアの中でも、趣旨目的を理解し、熱心に活動してくれる人には声をかけて運営側(実行委員会)に加わってもらっている。 ・ボランティアにとっても居場所になっていると思っている。

<p>⑦課題解決のための事業</p> <p>(課題解決のためにどのような事業を実施するか また、そのプロセス)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校の宿題のほか、日本語の基礎的な学習を行う学習支援と、子どもの放課後の居場所づくりを目的とした事業 対象: 中央区に在住の外国にルーツを持つ児童、生徒(小学生と本教室卒業生の中学生) ・子どもの支援のためには、親の就労や経済的自立に向けた改善が不可欠。教室を窓口、親の状況を確認し、家庭環境の改善につなげていく放射状の取組を狙っている。
<p>⑧連携協働の契機(触媒)</p> <p>(事例のどのようなプロセスが協働連携を進めさせる重要なチャンス、場づくり、手助けになったりしているのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪市立南小学校校長が、協力を求めて働きかけたことが一番のきっかけだと思う。 ・また、同時期に、「外国人母子支援のためのネットワーク」を形成しており、ステークホルダーが集まっていたことで、連携が生まれやすかった。 ・事件により社会の注目が集まったことから、支援の機運が高まり、寄付や協力も得やすかった。
<p>⑨リソースシェアリング</p> <p>(必要な資源のシェアリングのためにどのような働きかけを行い、どのような協力の関係ができていたのか(オーバーラップ))</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・参画団体の性質上、「ソーシャルワーク」の視点と、「学習支援」の視点では、意見が異なる部分もあったが、取組の目的や、めざす効果について、忌憚のない意見交換をし、よく話し合ったうえで、方針や取組を決めていった。 ・場所については、子ども子育てプラザを借りる上で、中央区や中央区社会福祉協議会の協力を、実行委員会の会議、また、中学生の特別教室の場所として、道仁会館を借りる上で、事務局長や町会の方の協力も得ている。
<p>⑩地域協働の手がかり</p> <p>(それぞれの主体がどういうところを手がかりにして今後の地域協働を進めていけばいいのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・外国にルーツを持つ子どもの支援のためには、親の就労や経済的自立に向けた改善が不可欠。教室を窓口、親の状況を確認し、家庭環境の改善につなげていく放射状の取組を狙っている。
<p>⑪協働が成果を生み出す要因</p> <p>(具体的な協働というのが成果を生み出すことができるようなものがどうやったら生まれてくるのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校や地域、そして、外国にルーツを持つ子どもや親など、多くの人が課題に感じており、共感があったので、壁と感ずることはなかった。 ・こういった取組は自分たちだけでやるべきでなく、いろいろなセクターと連携して行う必要があるという認識が着手した当初からあった。 ・一般的にはいってもたってもいられない想いで自分一人(自団体のみ)でも始めるといふことがあるのだと思う。しかし、その場合、後から連携に発展させる方が難しいのではないかと思う。
<p>⑫今後の課題</p> <p>(今後取組を進めて行くにあたっての課題はなにか 必要なことはなにか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・外国にルーツを持つ人への支援のロールモデルになりたいと考えている。 ・運営面でいうと、仕組が一定まわり始め、これからは安定飛行が求められるため、これからの運営が難しいと思っている。 ・なにかやらねばならないという機運の高まりも一定納まったなか、協賛者・支援者も含めたモチベーションの維持に工夫が必要だと思っている。 ・うまくいかなくなった時にも、続けていくために必要な要件とは何かを常に考えながら取り組んでいる。

(6) マンション住民が、マンション内外の住民のつながりづくりに取り組む事例

【取組概要】

取組名称	ふれあいサロン・ふれあいこども塾
地域名	福島区新家地域
地域概要	<ul style="list-style-type: none"> ・取組の中心となっている大開厚生年金住宅は、福島区西南の此花区との区界に位置し、同住宅の西隣には此花厚生年金住宅が存在するが地域が分かれている。 ・周辺にはUR住宅や市営住宅が混在する。 ・大開厚生年金住宅は自治会を形成し、町会にも加入している(新家西町会)。
地域課題・ニーズ	<ul style="list-style-type: none"> ・マンション住民が高齢化していく中、マンション住民間のつながり、マンション住民と地域住民のつながりが少ない。 ・自分たちが年をとっても大開厚生年金住宅に“住み続けたい”“住んでよかった”と思えるようなことをしたい。
参画している主体	大開厚生年金住宅自治会、ふれあいクラブ(大開厚生年金住宅住民(有志メンバー)のボランティア組織)、近畿大学学生
取組概要	<p>【ふれあいサロン】 マンション住民が高齢化していく中、自分たちが年をとっても“住み続けたい”“住んでよかった”と思えるマンションをめざし、マンション住民間、また、マンション住民と地域住民とのつながりを作るため、平成25年4月に、マンション住民有志によって、ボランティア組織「ふれあいクラブ」が結成された。当クラブの主な事業として、電球の取替や自転車のパンク修理など身近な困りごとを有償ボランティアが解決する「サポートふれあい」と、集会所横のテラスで参加者が憩う喫茶サロン「喫茶ふれあい」がある。 対象:マンション住民、近隣の地域住民 喫茶開催日:毎週木曜日の午前</p> <p>【ふれあいこども塾】 「ふれあいサロン」の取組に協力していた近畿大学学生が、「ふれあいサロン」などの取組に若い人を呼び込むことを目的に提案し、マンション住民のこどもや地域のこどもの宿題を中心とした学習支援や一緒に遊ぶ場として、「ふれあいこども塾」を開催。 対象:マンション住民のこども、地域のこども 開催日:不定期(主に夏休み限定)</p>
取組を行う中での課題	<ul style="list-style-type: none"> ・サロン開催自体や、スタッフへの参画要請等で当初は反発もあったが、反発している人に直接または、反発者の友人から説明等をしてもらうことにより、解決した。 ・サロン利用者に地域住民(マンション以外)の利用者が少なかった。 ・サロンを室内で開催すると敷居が高いと感じるため、オープンカフェを併設することで、気軽に利用できるよう工夫している。
中間支援組織のかかわり	<ul style="list-style-type: none"> ・「喫茶ふれあい」オープン当初より広報支援を中心に関わっており、その結果他地域でも、この喫茶を見習ったふれあい喫茶が区内(大開地域)でオープンしている。 ・百歳体操や映画鑑賞会等新たな活動を始めたいという声が上がった際には、他の地域から学んだノウハウを基に適宜アドバイスを行うことで、円滑な事業を支援している。 ・当取組みで知り合った近畿大学の講師や学生とは、大開地域で平成28年度に始動したコミュニティスペース事業「ふくしまサードプレイス」の内装考案や施工でも連携するなど、他の事業にもつながりを生かしつつ地域活動の活性化に努めている。
行政のかかわり	福島区「マンションと地域の架け橋事業」※(H24年度事業)のなかで、ふれあいサロンのノウハウを学ぶ場を出張提供していたため、マンションの集会施設で講義をしてもらい学ぶことができた。 ※マンション内での共益的活動(防犯、防災、地域福祉、コミュニティづくりなど)や、マンションと地域がともに行う活動に対する支援を「地域福祉アクションプラン推進委員会」「未来わがまち会議」が主体となって取り組み、区としても人的・財政的な支援を行う事業

【事例検証】

事例名	ふれあいサロン・ふれあいこども塾
<p>①課題設定のきっかけ</p> <p>(その課題を皆で取組むこととした契機は何か)</p>	<p>【ふれあいサロン】 マンション住民が高齢化していく中、自分たちが年をとっても“住み続けたい”“住んでよかった”と思えるようなことをしたいと考えていた。そこで、マンション内外の住民間のつながりを作ることなどを目的に、平成25年4月に住民有志によるボランティア組織「ふれあいクラブ」が結成された。目的達成のため、毎週木曜日の午前中にマンション住民及び地域住民を対象とした喫茶サロン「喫茶ふれあい」をしている。</p> <p>【ふれあいこども塾】 ・各種団体に「ふれあいサロン」の取組を紹介する中で、近畿大学講師が興味を示し、ゼミの学生達に紹介したところ、数名の学生が卒論テーマにしたいとの声があがった。 ・学生達が取組に参画してデータを収集する中で「若い人を呼び込むにはどうすればよいか」を自主的に考え始めた。自分たちで出来ることを相談した結果、住民の子供たちとふれあい夏休みの宿題や工作を教える「ふれあいこども塾」が始まった。</p>
<p>②課題</p>	<p>マンション住民が高齢化していく中、マンション住民間、及び、マンション住民と地域住民とのつながりが少ない。</p>
<p>③課題分析</p> <p>(どのような枠組み(メンバー)や方法で分析を行ったか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大開厚生年金住宅は自治会を形成しているため、自治会の集まりの場で話すことができた。 ・自治会のなかに運営スタッフが11人おり、中心的に取り組んでいる。11人のうち3人は元利用者からスタッフになっている。 ・また、近畿大学生がふれあいサロンを見学した際に、運営側に加わり、一緒に課題分析を行って「ふれあいこども塾」の取組を立ち上げた。
<p>④実施主体</p> <p>(課題解決のための実施主体(ステークホルダー)は誰か)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域内のつながりづくりの必要性を感じたマンション住民が有志のボランティア組織「ふれあいクラブ」を結成 ・近畿大学生が参画
<p>⑤参画のための仕掛け</p> <p>(主体に参画してもらうための仕掛け(インセンティブ)はどのようなものか)</p>	<p>【ふれあいサロン】 ・来客者の中で担い手になってくれそうな人に声をかけている。 ・来客者自身が高齢となり、行動範囲が狭まった際、地域内での居場所(ふれあいの場)や、“やること”の必要性を説明すると参画してくれる。(運営スタッフ11人中、3人が元利用者。) ・一人では参画を尻込みする人もいるので、地域内の人間関係を把握し、仲の良い友人同士を誘うことで、参画しやすい雰囲気をつくっている。また、少々強引にでも誘い続け、一回断られてもあきらめない。 ・初心者スタッフには、場の雰囲気に馴染んでもらうため、まずは簡単な補助業務からやって貰い、負担感等を無くす配慮している。 ・「出来る人が」、「出来る時に」、「出来ることだけ」という基本コンセプトを踏襲し、誰もが無理のない参画ができるようにしている。</p> <p>【ふれあいこども塾】 ・近畿大学所属の建築学部にする学生が主にボランティア活動をしてきている。 ・担い手の継続に向けて、現在ボランティア活動をしている大学生には、引き続き活動を続けてもらうよう声をかけている。</p>

<p>⑥当事者意識の触発</p> <p>(どうい活動が当事者意識を触発していくのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・毎週、「喫茶ふれあい」開催前には全員でコーヒーの味を確認し、いつも同じ味で提供出来るように確認するとともに、スタッフ間のコミュニケーションの機会を作っている。 ・スタッフのモチベーションを維持するため、サロンで得た利益の中からスタッフ全員でお弁当を食べるなど、楽しい要素を取り入れるよう工夫している。 ・他地域のサロンに対してもモデルケースとして紹介され、見学者が増えた。
<p>⑦課題解決のための事業</p> <p>(課題解決のためにどのような事業を実施するか また、そのプロセス)</p>	<p>ふれあいサロン・ふれあいこども塾</p>
<p>⑧連携協働の契機(触媒)</p> <p>(事例のどのようなプロセスが協働連携を進めさせる重要なチャンス、場づくり、手助けになったりしているのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大開厚生年金住宅は自治会を形成しているため、自治会の集まりの場で話すことができた。 ・マンションの自治会長が「やってみたらいい」と認めてくれた。 ・各種団体に「ふれあいサロン」の取組を幅広く紹介する中で、近畿大学講師が興味を持ち、同大学のゼミ生に話をしたところ学生たちの方から見学したいとの声があがった。
<p>⑨リソースシェアリング</p> <p>(必要な資源のシェアリングのためにどのような働きかけを行い、どうい協力関係ができているのか(オーバーラップ))</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・サロン開催場所や、開催すること自体、また、スタッフへの参画要請等で当初は反発もあったが、反発している人に直接または、反発者の友人から説明等をしてもらうことにより、解決した。 ・ふれあいクラブの中心人物の方が、テーマパークの館内飲食店でレギュラースタッフの経験があり、カフェのノウハウを持っていた。 ・大学生にとっては、取組に参加することで、自らの学習の一環となり、マンションにとっては、大学生のアイデアや担い手としての参加が得られることとなっている。 ・コーヒーの豆はコスト削減のため仕入業者と交渉。利用者にコーヒー豆購入店を紹介する代わりに、100g350円で購入。また、当初は豆を自家挽きするための機材も無料レンタル提供を受けていた。
<p>⑩地域協働の手がかり</p> <p>(それぞれの主体がどういところを手がかりにして今後の地域協働を進めていけばいいのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域内の人間関係を把握し、仲の良い友人同士を誘うことで、参画しやすい雰囲気をつくっている。 ・ふれあいクラブやふれあいこども塾に参加する住民が顔見知りになることで、住民間で助け合えるきっかけになる。 ・日曜日の一斉清掃活動等に参加した住民に対して、無料コーヒー券を配布し地域住民活動との連携を図っている。更に不定期ではあるが、平日には来れない住民のために年に数回、日曜日の開催を行っている。
<p>⑪協働が成果を生み出す要因</p> <p>(具体的な協働というものが成果を生み出すことができるようなものがどうやったら生まれてくるのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大学生の協力を得ることによって事業の幅が広がった。 ・マンションと地域の架け橋事業でノウハウを得ることができた。 ・ふれあいサロンをきっかけに、参加者がやってみたいいろいろなことを気軽に話し合える雰囲気ができ、自治会が主催する百歳体操や映画鑑賞会等、新たな活動の幅が広がった。
<p>⑫今後の課題</p> <p>(今後取組を進めて行くにあたっての課題はなにか 必要なことはなにか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・マンション外住民のさらなる参加 ・当事者意識を持続させるための、新たな手法の検討 ・広報活動の充実 ・サポートふれあい活動の拡がり

(7) 地域活動協議会から、企業等に働きかけて連携が生まれた事例

【取組概要】

取組名称	ふれあいサロン・ふれあいマルシェ
地域名	住之江区平林地域
地域概要	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅地域においてその多くを占める市営住宅・UR等では高齢化が進んでいる。 ・地域中央部に「貯木場」があり地域が分断されている。 ・平成28年度から「福祉バス」の運営が終了し、地域でバスを運行している。
地域課題・ニーズ	<ul style="list-style-type: none"> ・市営住宅・UR等が多く占めている地域で、そこで生まれた子どもが成長し、地域から出ることによって地域の高齢化が進んでいる。 ・地域中央部に「貯木場」である溜池があり地域が分断されており、いわゆる“買い物難民”の問題がある。
参画している主体	さざんか平林協議会(地域活動協議会)、事業者
取組概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ふれあいサロン「ひら茶」を、平林福祉会館を活用して、スタッフは15名ほどで、毎週木曜日に開催している。対象者は、平林だけでなく新北島も含めている。 ・「ふれあいマルシェ」は2年前より、高齢者の買い物支援対策として取組みを始め、第1・3木曜日に平林福祉会館前で開催している。実施事業者については、住之江区まちづくりセンターが行う「企業・NPO・学校・地域交流会」で知り合った地域内外の企業や商店、農家等とつながりをもつ事業者に出店を依頼。また、出店者のメリット(収益)も考え、当日の場所代等は無料としている。 ・平林地域の活動として、平林地域に約80社ある企業からの協賛金等も財源としている。 ・福祉会館への交通手段がないため、地域独自で送迎バスの運行を行っている。(地域バス) ・平林地域外の方も参加可能にするなど、多くの方が参加できる環境を整備している。
取組を行う中での課題	<ul style="list-style-type: none"> ・地域中央部に「貯木場」である溜池があり地域が分断されており、いわゆる“買い物難民”の問題がある。 ・貯木場も段階的に埋め立てを行っている。
中間支援組織のかかわり	<ul style="list-style-type: none"> ・まちづくりセンター提案による地活協関係者での「地域の未来像を語り合う懇談会」(平成25年11月)での課題抽出と共有(買い物難民問題が話題に) ・企業・NPO・学校・地域交流会(平成26年12月)での参加企業等に向けた地域課題のプレゼン支援と参加企業等とのコーディネート ・「買い物難民」の実態を探るアンケート調査、南港口高層マンション群(市営住宅・UR等)の高齢者アンケート調査(平成26年11月～平成27年1月)による課題検証
行政のかかわり	<ul style="list-style-type: none"> ・ふれあいサロンに地域活動協議会補助金を活用している。 ・まちづくりセンター(区役所)が、年に数回70社・団体が参加する「企業・NPO・学校・地域交流会」を企画しており、この交流会で、協力企業に出会うことができた。 ・地域バス事業たちあげにかかる情報提供・助成金申請支援

【事例検証】

事例名	ふれあいサロン・ふれあいマルシェ
<p>①課題設定のきっかけ</p> <p>(その課題を皆で取組むこととした契機は何か)</p>	<p>“買い物難民”の問題が地域課題となっており、これを解決するために取り組んだ。</p>
<p>②課題</p>	<p>地域中央部に「貯木場」があり地域が分断されており、いわゆる“買い物難民”の問題があった。</p>
<p>③課題分析</p> <p>(どのような枠組み(メンバー)や方法で分析を行ったか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・平林地域活動協議会として各種団体(町会、社協、企業、PTA、子ども会、老人会等)が月1回福祉会館で会合を開いており、ここで課題について話し合った。 ・企業と地域とで年数回交流会を開催している。 ・地域中央部に「貯木場」があり地域が分断されている、いわゆる“買い物難民”の問題、また、地域住民の高齢化について、地域活動協議会として、高齢者に対する課題を認識一致し、その解決方法として「ふれあいマルシェ」に取り組んだ。 ・まちづくりセンターによる「地域の未来像を語り合う懇談会」(平成25年11月)で課題を抽出し共有した。
<p>④実施主体</p> <p>(課題解決のための実施主体(ステークホルダー)は誰か)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・平林地域活動協議会として各種団体(町会、社協、企業、PTA、子ども会、老人会等) ・事業者
<p>⑤参画のための仕掛け</p> <p>(主体に参画してもらうための仕掛け(インセンティブ)はどのようなものがあるか)</p>	<p>【担い手(参画者)の確保】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・PTAに積極的に声をかけるようにしている。 ・PTAなどで活動している若い人を見かけたら、「ヒマになったら(こっちに)来てね」という声かけを実践 <p>あれもこれもは大変であるので「できるとき、できること」から。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「時間ができたら手伝って」が基本 <p>拘束するようなことはNGで、用事があるときは行事の日でも休んでもらっている。</p>
<p>⑥当事者意識の触発</p> <p>(どのような活動が当事者意識を触発していくのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動を労うことが絶対必要。有志で旅行に行ったり、食事に行ったり。楽しんでもらう工夫が必要で、そうでないと長続きしない。 ・ボランティアを大切にしている。例えば、誕生日にはお祝いするなど。 ・ボランティア活動を労い、ボランティアを大切にすることも、役職者の大切な仕事となっている。

<p>⑦課題解決のための事業</p> <p>(課題解決のためにどのような事業を実施するか また、そのプロセス)</p>	<p>ふれあいサロン、ふれあいマルシェ、地域バスの運行</p>
<p>⑧連携協働の契機(触媒)</p> <p>(事例のどのようなプロセスが協働連携を進めさせる重要なチャンス、場づくり、手助けになったりしているのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ふれあいマルシェで野菜を販売する事業者とつながりが得られたのは区役所主催の「企業・NPO・学校・地域交流会」開催(年数回実施)による。 ・会長が事業所経営をしており、地元の企業とつながりがあった。 ・ふれあいサロンには近隣企業に勤務している人も来れるようにしており、受け入れる体制にしている。
<p>⑨リソースシェアリング</p> <p>(必要な資源のシェアリングのためにどのような働きかけを行い、どのような協力の関係ができてきているのか(オーバーラップ))</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ふれあいマルシェで事業者の商いがうまくいくように、同日に地域のイベント(お祭り等)を行い、地域で人を呼ぶように工夫している。 ・仕入れにあたっては、地産地消を意識している。 ・平林福祉会館が、地域にとって使いやすい会館となるよう、近隣企業も利用可能とするなど、工夫努力をしている。
<p>⑩地域協働の手がかり</p> <p>(それぞれの主体がどのようなところを手がかりにして今後の地域協働を進めていけばいいのか)</p>	<p>「企業・NPO・学校・地域交流会」の場があったことで、普段つながる機会がない企業と出会うことができ、買い物難民という地域課題に協働して取り組むことができた。</p>
<p>⑪協働が成果を生み出す要因</p> <p>(具体的な協働というのが成果を生み出すことができるようなものがどうやったら生まれてくるのか)</p>	<p>地域に企業が多く存在し、企業と協力しあうことが大切という認識のもと、町会だけで活動するのではなく、みんなが一緒になってまちづくりをするという意識で活動をしている。</p>
<p>⑫今後の課題</p> <p>(今後取組を進めて行くにあたっての課題はなにか 必要なことはなにか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・よりニーズにあった取組に発展させていきたい。 ・市営住宅・UR等をリフォームするなどして、若い人の入居を促進していきたい。 ・災害時等に備えて町会加入を増やしていきたい。

●個人の担い手が活動をはじめる事例 一覧表

【参考】

	NPO法人緑・ふれあいの家 (鶴見区緑地域活動協議会) 理事長 久木 勝三 氏	平野区瓜破西地域活動協議会 会長 橋本 勝三 氏	淀川区新東三国地域活動協議会 総務部会長 増田 裕子 氏	淀川区三津屋地域活動協議会 会長 泉水 清 氏	特定非営利活動法人 コリアNGOセンター 事務局長 金光敏 氏	ふれあいクラブ 代表 竹内 利和 氏	住之江区さざんか平林協議会 副会長 佐野 悦子 氏
1)活動をはじめたきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・児童から相談があり小学校の教室に行くと全部の窓ガラスが割れ真冬の中震える手で勉強している状況に驚き、異様に感じたことがきっかけだった。 ・学校だけの責任ではなく、地域の無関心が原因であることを考えて、信頼し合え、協力し合える関係が必要と考え手探りで活動を始めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・約35年前、瓜破西地域に引越してきた。 ・引越した地域は、当初、飛び地として他の町会に含まれていたが、越してきて2年目に、飛び地だけで独立した第5町会をつくってほしいと、連合から頼まれた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家族の介護を通じて、電池の取り換えなどで困っている人がいることを知り、お手伝いできることがあることを知った。 ・家族の介護がひと段落し、近隣のお役に立てればと思っていたところに、マンション町会の班長の役が順番でまわってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お子さんの体が弱く、外で遊ばせたかったことがきっかけ。 ・お子さんは、キャッチボールや野球に興味を持っていて、地域には町会対抗の野球大会があったが、所属する町会には野球チームがなかった。 ・そこで、自ら回覧板を回し野球をしたい子どもを募ったところ、充分に子どもが集まったので、野球チームを結成。グラウンドを借りて活動を始めた。 ・この活動を見込まれ、初めは町会の子ども会に参加、次に青少年指導員をやらなかと声がかかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・在日コリアン三世として生野区に生まれたことで、幼いころから、課題意識、当事者意識に直面してきた。 ・民族学級の取組に支えられて育ったと感じている。 ・韓国に帰国する経験を経て再び日本に来たとき、知人から、民族学級の運営側として活動しないかと誘われ、活動することとなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・退職する2年前にマンションに引越してきた。 ・当初は、地域活動をする予定はなく、管理組合役員を頼まれても断り続けていたが、断り切れなくなって活動をはじめた。 ・役員を続けていたら自治会長を頼まれ、こちらも断り続けていたが、断り切れなくなって引き受けることになった。 ・住民間のコミュニケーションの必要性を感じていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの成長に伴い、PTAの役員を頼まれたことがきっかけ。 ・活動をはじめると家族に迷惑をかけると考え、最初は断っていたが、何度も頼まれるうちに、夫が引き受けるよう勧めてくれたことが大きなきっかけとなった。
2)活動をはじめるプロセス	<ul style="list-style-type: none"> ・PTA、子ども会の状況を把握し、学校の授業参観に出向いて現場を確認するとともに、地域からも広くアンケートやヒアリングを半年を掛けて実施した。区役所や教育委員会に相談し、情報を収集し、学校と地域との円卓会議を設定することとした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・もともとは、別の人が町会長に就任予定で話を進めていたが、4～5日前に突然、就任予定の方の都合が悪くなり、町会長へ就任する話を持ち上がった。 ・はじめは断ったが、町会を立ち上げてから安定稼働するまでのルールを引く期間となる3年間の約束で、町会長を引き受けた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マンション町会の班長になるのと同時に、町会の女性部長になった。 ・女性部長として新東三国連合の女性部会で活動することになり、同時に、ネットワーク委員、食事サービス委員に就任し、翌年にはネットワーク推進員になった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・三津屋地域では、大阪市委嘱の青少年指導員の他に、地域委嘱の青少年指導員がいて、全体で50人程度いた。 ・就任当初は、青少年指導員の活動があまり活発でなかったため、かえって事業がやりやすかった。 ・成人式は、青少年指導員の活動としてはじめ、各種団体の参加や寄付も集まる行事になっていった。 ・運動会や夜店事業も青少年指導員の活動としてはじめ、今では、地域社会福祉協議会の事業となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・民族学級の運営からはじまり、この活動に長く関わった。 ・自分の中からこみあげるものがあり、揮発的な感覚ではなく、自発的な感情で取り組みはじめた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自治会長に就任してから、区の広報で、マンション住民間のコミュニケーションを取る手法について出張講義する取組(福島区主催「マンションと地域の架け橋事業」)を見つけて申し込んだ。 ・講義でふれあいサロンの事例紹介があり、受講した住民の中からやりたいという人が出てきたので、講師の協力を得ながらボランティア組織(ふれあいクラブ)を結成した。 ・ボランティア組織結成にあたっては、熱心にスタッフを集めてくれた人がいて、現在もスタッフのまとめ役となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・PTAで楽しく活動することができ、そこから町会の女性部長を頼まれて引き受けることになった。 ・どのようないきさつで引き受けたのか覚えていないほどなので、負担を感じさせない巧みな勧誘だったのだと思う。
3)活動をはじめるときの壁	<ul style="list-style-type: none"> ・地域内では、会計や事業の不透明感と組織運営などで争いも絶えない状況の中、学校も同様で、PTAに入らない保護者や壊滅状態の子ども会などで、現状協力してくれる担い手も無いのが悩みだった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・町会長を引き受けるにあたって、特に負担に感じることはなかった。 ・当時、第5町会の規模は約90世帯で、戸建ての住宅で構成されていた。 ・町会長を引き受けてから、組織づくりをするために、1軒1軒まわって話をきいた。 ・仕事上の経験から、90世帯の規模をそれほど負担に感じなかったのかもしれない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マンション町会は立ち上がったばかりで取組があまりなく、必要な取組を考えてはじめることができたが、連合には取組が多く、所属する町会からの参加者が少なかったことから、取組を考えるよりも参加者集めに追われることになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・就任当初、青少年指導員の活動は研修参加とその内容を地域で指導することがメインで、地域行事に関わるものがほとんどなかった。そんな中、地域全体での行事が少なかったのは、はたちのつどいや運動会、夜店など、地域全体でそれまでなかった事業を新しく企画運営した結果、地域行事に深く関わることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身は特に壁はなかった。 ・周囲の様子をみると、子育てなどによる家庭環境や経済状況の変化により、民族学級の運営等の活動を離れる人もいる。 ・活動を離れても、保護者としての活動へとスタイルを変えて続けている人もいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域活動をする予定がなかった。 ・住民の高齢化も進む中、住民間のコミュニケーションの必要性を感じていたが、取り組み方が分からなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動をはじめると家族に迷惑をかけると考えたが、家族の理解が得られたので、始めることができた。 ・活動自体は、もともと人と関わるのが好きで、ボランティア活動に興味があったこともあり、壁に感じることはなかった。
4)活動をはじめることができた主な要因	<ul style="list-style-type: none"> ・状況改善の契機となったのは、地域でともに立ち上がってくれる仲間が出来た事と、まちづくりセンターが紹介してくれたプロボノチームの協力だった。 ・学校も教頭先生や複数の教員OBの協力も得られ、今回の問題を課題として学校に限定せず、「地域全体」として共有できるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・引越してきたタイミングで、新町会を立ち上げることになり、町会長を頼まれた。 ・仕事上の経験から、90世帯の規模をそれほど負担に感じなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家族の看護介護がひと段落して時間ができ、地域のお手伝いをしてほしいと考えていたところに、マンション町会の班長の役が順番でまわってきてタイミングがよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お子さんの体が弱く、外で遊ばせたかったことがきっかけ。 ・お子さんは、キャッチボールや野球に興味を持っていて、地域には町会対抗の野球大会があったが、町会に野球チームがなかったため、自ら作ることにした。 ・地域の人も場所も良く知っていたので、始めることに不安はなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身が民族学級等の取組に支えられて育ったと感じていたの、子どもたちを支えたいという強い思いがあり、タイミングよく知人から運営側として活動しないかと誘われたこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域活動をする予定がなかったが、熱心に頼まれたこと。 ・住民の高齢化も進む中、住民間のコミュニケーションの必要性を感じていたところ、区の広報で、マンション住民間のコミュニケーションを取る手法について出張講義する取組を見つけたこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・PTAの役員を頼まれたときに、夫や子どもたち家族の理解が得られたことから、活動をはじめることができた。 ・もともと人と関わるのが好きで、ボランティア活動に興味があった。

●個人の担い手が活動をはじめる事例 一覧表

【参考】

	NPO法人緑・ふれあいの家 (鶴見区緑地域活動協議会) 理事長 久木 勝三 氏	平野区瓜破西地域活動協議会 会長 橋本 勝三 氏	淀川区新東三国地域活動協議会 総務部会長 増田 裕子 氏	淀川区三津屋地域活動協議会 会長 泉水 清 氏	特定非営利活動法人 コリアNGOセンター 事務局長 金光敏 氏	ふれあいクラブ 代表 竹内 利和 氏	住之江区さざんか平林協議会 副会長 佐野 悦子 氏
5) 中心的な役割を担うようになった理由	<ul style="list-style-type: none"> ・学校での問題解決に立ち上げたチームが、本質的な地域に点在する課題と向き合う必要があり、その解消のために多岐にわたって活動を始めた事が、発端となった。 ・こうした努力が少しずつ地域に浸透し、他の活動団体を刺激した結果、地域でのコミュニティが復活し団体同士が公平公正に話し合えるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第5町会の町会長になって2年目に、連合の総務を頼まれた。 ・総務に就任した当初は、瓜破西地域に来て間もないことや、年も若いことから、様々な意見も受けたが、まずは定款を作成して、年間計画、会計書類、事業報告などの書類を整備し、組織づくりを固めていくうちに、認められるようになっていったと思っている。 ・地域を良くしていくために必要であれば、住民の代表として厳しいことも言わなければいけないと考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マンション町会の役員間で励まし合い、連合の活動を辞めずに続けたことで、連合の役員になっていった。 ・地域活動協議会の立ち上げを任せられた時は、地域のことが分かってきていたことだったので引き受けることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・それまでは地域全体での行事が少なかったが、はたちのつどいや運動会、夜店などの企画を地域の各町会に声がけたことで、14町会全部が協力してくれるようになり、地域全体の行事として運営することができるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・民族学級の運営の取組からはじまり、長く関わった。 ・2004年に在日コリアンへの支援を行う3つの団体が統合し、特定非営利活動法人コリアNGOセンターとなったが、統合時のスタッフとして活動を続けた。 ・先輩たちに育ててもらったことが今につながっている。 ・たとえ目立って批判されても、大事だと認識することは最後までやるタイプ(先頭に立つて活動することが苦にならない)ということもあるかもしれない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・役員に就任した当初は、できるだけ発言しないようにしていたが、発言した内容が住民に受け入れられたのかもしれない。 ・地域活動はボトムアップの活動と考えており、誰もが自由に意見交換できる環境を心がけている。 ・役員や会長は住民の考えを代表して対外的に発言する役割と思っているので、言いにくいことでも率先して発言するようにしている。(嫌われ役になるところが評価されたのかもしれない。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動を楽しんでいるうちに、気が付いたら、連合の女性部長になり、協議会の副会長になっていた。 ・同じ方向を向いて、一緒に考えることができるスタッフに恵まれており、役を引き受けることが苦にならなかった。 ・協議会の会長が、「失敗を恐れずやればいい」と背中を押してくれる。
6) 活動を継続する原動力	<ul style="list-style-type: none"> ・活動を継続するためには、活動する拠点と人的資源そして活動の原資が必要となった。そのためには、地域での主体となる団体が公明であり開かれたものでなければ、人的支援を受けることができないため運営会議での公平性を担保し公平に役員を選抜を実施した。 ・事業の継続を図るには補助金や助成金だけでは地域での多様に事業継続を図る事が出来なくなる。そこで、収益事業の獲得を実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動を継続する原動力は、使命感だと感じている。 ・安全安心な地域を、自分たちの力で作っていかねければならないという使命感がある。 ・みんなで相談しながら取り組んだことが、良い方向に進んでいく達成感も原動力になっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域内、淀川区内、そして淀川区外にと、相談できる人が増えていった。 ・同じ立場の人との意見交換は励ましになり、また、地域外の人や違う立場の人との意見交換は新鮮で刺激になる。 ・批判的な人や無関心な人を、振り向かせたいと思う気持ちがやる気につながっている。 ・信じてやらせてくれる人、応援してくれる人がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの活動を変えるとき、新しい活動を始めるときには、いろいろな不安要素が出てくるのが当たり前と考えている。 ・準備はしたうえでまずはやってみて、続けるべきものなら改良していくという方法で、前向きに進めている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・当事者なので、この課題から逃げられないという思いや、正面から向き合っていきたいという思いがあり、それが原動力となっている。 ・活動を続けていると、子どもたちの喜ぶ顔が見られることも励みになっている。 ・子どもの成長に関わることができ、自分の子ども時代を取り戻しているような感覚もある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者の楽しむ様子が見られ、住民間のコミュニケーションが生まれる場になっている実感が得られることが、ふれあいサロンスタッフのやる気やチームワークにつながっている。 ・「出来る人が、出来る事を、出来る時に」無理をしないをモットーに、楽しみながら活動できている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・住んでいる地域を、よい地域にしたいという思いを持っている。 ・事業への参加者だけでなく、スタッフも共に楽しみながら活動していることが、活動を継続する原動力になっている。 ・協議会の会長が、スタッフを扱ういろいろな企画を提案してくれ、スタッフのチームワークを深める機会になっている。
7) 新しい担い手を増やす働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・学校と地域との円卓会議の設定等、意見交換できる場づくりや、SNS等による情報発信・拡散、また、広報紙も町会加入者だけでなく全戸配布するなどして、現状や課題を共有し、共感を得ながら取組を進めた。 ・実際に取組に従事するスタッフがいないと取組は進まないため、事務局長、計理、事業のスタッフ等の組織づくりを行った。計理には商売をしていた人に担ってもらうなど、適材適所を心がけ、また、無償には限界があることから有償も取り入れた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい担い手を増やす働きかけとしては、まずは、足を運んで、顔を合わせて、知り合いになることだと思っている。 ・活動者を大切に、若い人も発言しやすい環境になるよう気を配っている。 ・地域活動協議会という組織は、学校やPTA、その他諸団体がともに協働して活動することができるなど、若い人が参画しやすい組織だと感じている。 ・第5町会はマンションが多く、地域活動に協力してもらうためには、住民だけでなく、施主にも、地域活動への理解を深めてもらうよう、マンションの建設時から交流を図っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・取組に興味を持った人に集まってもらうため、全戸配布で募集。 ・マンション町会では、防災の取組として、フロア住民で集うフロア会議をとおして顔の見える関係づくりをしており、周知と併せて負担にならない程度に声をかける。 ・何かの役割を担ってもらわなくても、まずは自分ごとに考えてもらえばいいと思って周知・募集している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・町会の夜店や音楽祭などのイベントへの参加を勧めて、地域の様子を知ってもらい、顔見知りを増やしてもらって、手伝ってもいいなと思えたらスタッフに加わってもらうようにしている。 ・三津屋地域活動協議会の中に、パワーアップ部会という新しい人や団体が入りやすい受け皿を設け、NPOや企業をはじめ幅広く人材や協力団体を募っている。 ・現在、地元企業(約17社)に入ってもらよう働きかけを行っており、防災訓練への参加や小学生が社会見学に行くなど、地域の企業に関わる場を増やしていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもへの学習支援はボランティアが担っており、ホームページでの募集や、大学に声をかけての募集を行っている。 ・テレビやメディアに取り上げられることで、ボランティアの問い合わせに繋がっている。 ・新しいボランティアに向けたガイドダンス、継続ボランティアに向けた指導力・意識向上の研修、支援手法に関する研修等を行っている。 ・ボランティアの中でも、目的を理解し熱心に活動してくれる人には、声をかけて運営側(実行委員会)に加わってもらっている。 ・ボランティアにとっても居場所になっていると思っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「出来る人が、出来る事を、出来る時に」無理をしないをモットーに、幅広くオープンに取組への参加を呼び掛けている。 ・まちづくりセンターの協力で、取組内容をいろいろな機会に広報することで、大学生の参加が得られたり、同様の取組をしている団体と情報交換する機会が得れている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動を楽しんでもらうことを心掛けている。楽しければ、PTAや子ども会の活動だけでなく、地域の活動にも参加してくれると考えている。 ・ボランティア活動に興味を持っているが、どうすればいいかわからない人もいるので、地域にボランティア部も創出した。 ・PTA、子ども会と地域の女性部活動と一緒にを行うことで、地域との距離が近くなり、地域の活動にスムーズに加わる流れができてきている。

●団体の活動が活発化し、連携協働して課題解決に取り組む事例 一覧表

【参考】

事例名	地域における子育ての取組 (鶴見区緑地域)	アクティブラーニング型災害訓練 (平野区瓜破西地域)	マンションの防災訓練 (淀川区新東三国地域)	商店街活性化の取組 (淀川区三津屋地域)	外国にルーツを持つ方を支援する取組 (中央区東心斎橋地域)	ふれあいサロン・ふれあいこども塾 (福島区新家地域)	ふれあいサロン・ふれあいマルシェ (住之江区平林地域)
①課題設定のきっかけ (その課題を皆で取組むこととした契機は何か)	<ul style="list-style-type: none"> 地域の小学校が荒れた時期があり、何とかしなければと思ったことがきっかけ。 課題の解決が多岐にわたる為、必然的に多様な地域課題に対処することとなった。 学校と信頼し合え、協力し合える地域をつくることをめざして、手探りで活動を始めた。 	<ul style="list-style-type: none"> 大阪市立大学都市防災教育研究センターのメインテーマである。 大和川に隣接する地域に居住している市民にとって、防災は関心の高い課題であると考え、この地域に声をかけた。 	<ul style="list-style-type: none"> マンション管理組合の理事長とマンション町会の会長が同じ思いで、マンションに合同の自主防災組織を作りたいという熱意があった。 	<ul style="list-style-type: none"> 2010年、三津屋商店街で、三津屋生まれのアマチュア演奏家の方が「音楽で地域、とりわけ商店街に貢献できないか」と相談し、「何か面白いことが実現できる場所」として「みつや交流亭」を紹介されて訪れたことがきっかけ。 商店街の集客が減少する中で、イベントが慢性化していることに商店街も問題意識をもっていった。 	<ul style="list-style-type: none"> 2012年に、関西国際交流団体協議会が、「マーテル外国人母子支援ネットワーク形成事業」(大阪府新しい公共支援事業)として、外国人母子支援のあり方をテーマに外国人支援を行う団体のネットワークを形成しており、ステークホルダーが集まる場所があった。 2012年4月に、中央区でフィリピン人女性による実子刺殺自殺未遂事件が起き、大阪市立南小学校校長が、いろいろな集まりで協力を求める中、このネットワークにも参加して協力を求めた。 	<p>【ふれあいサロン】</p> <p>マンション住民が高齢化していく中、自分たちが年をとっても“住み続けたい”“住んでよかった”と思えるようなことをしたいと考えていた。そこで、マンション内外の住民間のつながりを作ることを目的に、平成25年4月に住民有志によるボランティア組織「ふれあいクラブ」が結成された。目的達成のため、毎週木曜日の午前中にマンション住民及び地域住民を対象とした喫茶サロン「喫茶ふれあい」をしている。</p> <p>【ふれあいこども塾】</p> <ul style="list-style-type: none"> 各種団体に「ふれあいサロン」の取組を紹介する中で、近畿大学講師が興味を示し、ゼミの学生達に紹介したところ、数名の学生が卒論テーマにしたいとの声があがった。 学生達が取組に参画してデータを収集する中で「若い人を呼び込むにはどうすればよいか」を自主的に考え始めた。自分たちで出来ることを相談した結果、住民の子供たちとふれあい夏休みの宿題や工作を教える「ふれあいこども塾」が始まった。 	<p>“買い物難民”の問題が地域課題となっており、これを解決するために取り組んだ。</p>
②課題	<ul style="list-style-type: none"> 学校が荒れた時期に、PTA、子ども会の活動も活発ではなく、学校側も相談できる状況ではなかった。 PTAに入らない保護者も多く、また子ども会の役員のなり手がおらず、保護者もあまり関与していない状態だった。 学校側から地域への働きかけもなかったが、地域側から学校への働きかけもなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 大和川増水時に地震が発生すると堤防が一部破損するなどし、河川氾濫の危険性がある。 災害訓練への参加者が少ない。 住民に高齢者が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> マンションに自主防災組織が、まだ組織されていなかった。 防災訓練の内容では、実際の災害時にマンション住民が安全に避難できる状況とはいえなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 商店街の活性化 住民同士のつながり、顔の見える関係づくり 駅前マンション住民といった新しい住民にも地域に関心を持ってほしい 次世代を担うこどもたちの地域への愛着を育む。 住民同士のつながりや地域への愛着、商店街の活性化を実現する手法として「音楽の力」に着目 	<ul style="list-style-type: none"> 中央区内の小学校には15カ国以上の子どもたちが在籍し、その中には、日本語での学習に困難を抱えたり、仕事が忙しい保護者との時間が持てず、一人で過ごすケースが多くみられる。 	<p>マンション住民が高齢化していく中、マンション住民間、及び、マンション住民と地域住民とのつながりが少ない。</p>	<p>地域中央部に「貯木場」があり地域が分断されており、いわゆる“買い物難民”の問題があった。</p>
③課題分析 (どのような仕組み(メンバー)や方法で分析を行ったか)	<ul style="list-style-type: none"> 学校と地域との円卓会議を設定して、課題分析や意見交換を行った。 PTA、子ども会の状況を把握し、学校の授業参観に向いて現場を確認するとともに、区役所や教育委員会に相談して情報を収集した。 保護者や地域に向けたアンケート、インタビュー等も丁寧に行った。 関係者による現状や課題等の情報共有は、上記円卓会議、SNSによる情報発信、広報紙の全戸配布等を使って行い、多くの人に関わってもらう工夫した。 	<ul style="list-style-type: none"> 大阪市立大学都市防災教育研究センターの防災教育プログラムの一つとして、大学中心で実施した。 災害を想定しながら行動シナリオを作成する作業が、防災力を高めることに役立つのだが、このシナリオ作成に地域の方にあまり参加いただけなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 管理組合と町会合同で自主防災組織を作ることをめざし、準備委員会を立ち上げた。 両組織の毎月全戸配布の議事録と一緒に、準備委員会の参加者や、自主防災組織の隊員を募集した。 防災訓練に先立ち、防災訓練の目的を再確認し、災害時の避難行動について住民自身で考える打合せの場を持った。 	<ul style="list-style-type: none"> みつや交流亭のネットワークを通じて、実行委員会を立ち上げる。 実行委員会には地域、商店街、みつや交流亭、演奏者と多彩なメンバーが参加。 委員長には地元連合町会会長になっていただき、大阪市音楽団からも団員が参加することとなった。 	<ul style="list-style-type: none"> 「外国人母子支援のためのネットワーク」に参加していた団体や個人を中心に、はじめから多くの団体で課題分析を行い、課題解決策について話し合うことができた。 参加団体の特性である、ソーシャルワークの視点と、学習支援の視点では、意見が異なる部分もあり、取組の目的や、めざす効果について、深く話し合った。 	<ul style="list-style-type: none"> 大開厚生年金住宅は自治会を形成しているため、自治会の集まりの場で話すことができた。 自治会のなかに運営スタッフが11人おり、中心的に取り組んでいる。11人のうち3人は元利用者からスタッフになっている。 また、近畿大学生がふれあいサロンを見学した際に、運営側に加わり、一緒に課題分析を行って「ふれあいこども塾」の取組を立ち上げた。 	<ul style="list-style-type: none"> 平林地域活動協議会として各種団体(町会、社協、企業、PTA、こども会、老人会等)が月1回福祉会館で会合を開いており、ここで課題について話し合った。 企業と地域とで年数回交流会を開催している。 地域中央部に「貯木場」があり地域が分断されている、いわゆる“買い物難民”の問題、また、地域住民の高齢化について、地域活動協議会として、高齢者に対する課題を認識一致し、その解決方法として「ふれあいマルシェ」に取り組んだ。 まちづくりセンターによる「地域の未来像を語り合う懇談会」(平成25年11月)で課題を抽出し共有した。
④実施主体 (課題解決のための実施主体(ステークホルダー)は誰か)	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの健全育成に関係する団体を想定し、活動が活発な団体を中心に、活動が活発でない団体の活動を立て直しながら、参画を促した。 解決のための課題処理には、地域問題のそのものの解決や支援が必要であったため、主体となった活動が必然的に求められる結果となった。 	<ul style="list-style-type: none"> 災害時の行動を検討し、関係しそうな団体や施設を考える→地活協、区役所、消防、福祉施設 今後参画してほしい主体:地下鉄、医療機関、警察、災害時協力企業への登録企業、区社会福祉協議会(災害ボランティアセンター)等 中学生を主体にする(今後地域を支えていく可能性がある中学生にリーダーシップを持ってもらう) 	<ul style="list-style-type: none"> マンション住民が災害時に安全に避難するために連携すべき主体を検討(マンションの住民、マンションの管理組合、小学校、地域の自主防災組織、地域の災害本部など) 	<ul style="list-style-type: none"> 音楽で地域や商店街に貢献することに共感する人、団体 具体的には、連合町会(地域活動協議会)、商店街振興組合、子ども会、演奏家、みつや交流亭など 	<ul style="list-style-type: none"> 2012年に、関西国際交流団体協議会が、「外国人母子支援のためのネットワーク」を形成しており、ステークホルダーが集まっていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域内のつながりづくりの必要性を感じたマンション住民が有志のボランティア組織「ふれあいクラブ」を結成 近畿大学生が参画 	<ul style="list-style-type: none"> 平林地域活動協議会として各種団体(町会、社協、企業、PTA、こども会、老人会等) 事業者

●団体の活動が活発化し、連携協働して課題解決に取り組む事例 一覧表

【参考】

事例名	地域における子育ての取組 (鶴見区緑地域)	アクティブラーニング型災害訓練 (平野区瓜破西地域)	マンションの防災訓練 (淀川区新東三国地域)	商店街活性化の取組 (淀川区三津屋地域)	外国にルーツを持つ方を支援する取組 (中央区東心斎橋地域)	ふれあいサロン・ふれあいこども塾 (福島区新家地域)	ふれあいサロン・ふれあいマルシェ (住之江区平林地域)
<p>⑤参画のための仕掛け (主体に参画してもらうための仕掛け(インセンティブ)はどのようなものがいいか)</p>	<p>[情報の発信・共有] ・学校と地域との円卓会議の設定等、意見交換できる場づくりや、SNS等による情報発信・拡散、また、広報紙も町会加入者だけでなく全戸配布するなどして、現状や課題を共有し、共感を得ながら取組を進めた。</p> <p>[定年制度の導入] ・運営委員会をみんなで話し合える場にし、多くの人や団体が参画しやすくなることを目的に、地域活動に定年制度を導入した。</p> <p>[組織づくりと参画団体・者の負担軽減] ・実際に取組に従事するスタッフがいないと取組は進まないため、事務局長、計理、事業のスタッフ等の組織づくりを行った。計理には商売をしている人に担ってもらうなど、適材適所を心がけ、また、無償には限界があることから有償も取り入れた。 ・スタッフがいないことで、担い手には自分のできる範囲の中で参画してもらうことができ、過度な負担感を感じることなく参画できる。</p>	<p>対象:個人、団体 ・中学生を主体とすることで、見守りの観点から地活協など多くの人が参加してくれた。 ・「災害訓練の中で中学生が立ち寄る施設となる」など、役割を決めることで、参加のハードルを下げた。 対象:個人 ・タブレットを使い、まちをフィールドにしたゲームという形で、中学生が楽しみながら能動的に訓練ができるようにしている。</p>	<p>対象:個人 【スタッフの場合】 ・会議への出席についても、メールで情報を共有できればよいことにし、時間の都合のつきにくい人でも参加しやすくした。 ・ポスター作成が得意ならポスターだけ等、活動内容の希望にも応じて参加しやすくした。 【参加者の場合】 ・両隣やフロアで助け合うことを基本に、フロア会議を開くことを促した。 ・顔の見える関係をつくると、隣人の高齢者、障がい者、要支援者をお互いに知ることができ、両隣で助け合って避難することができるようになった。 ・防災訓練に先立ち、防災訓練の目的や災害時の避難行動について住民自身で考える場を持ち、訓練内容を検討したことで、防災への意識が高まった。 ・全戸配布している安否確認のプレートを使って、家族の安否を隣人に知らせる参加、両隣の安否をプレートで確認してマンションの1階まで避難する参加、そのまま小学校まで避難して小学校での訓練も受ける参加と、参加の段階を作り、住民の都合に合わせた参加ができるようにし、小学校まで避難した人には、防災食が食べられるという楽しい要素(訓練)を用意した。 ・災害発生時に自宅にいない家族もいる。その場合、家族の時間帯ごとの居場所を把握しておき、それを災害対策本部に報告することで、安否確認の精度が格段に上がるといふ情報を共有し、家族の居場所を把握することを促した。 ・参加を促すために、日頃から挨拶をすること、また、エレベーターで会ったときには防災訓練のポスターを指しながら、「来てください」と声をかけることを心がけた。</p>	<p>・商店街を舞台にすることで、商店街また三津屋地域の活性化につながることから、商店街の店舗、三津屋地域の各種団体から協力が得られた。 ・ユニークな取組なので、回を重ねるごとに関わりたいという演奏者、スタッフ、協賛者が増えている。</p>	<p>対象:団体 ・2012年に、関西国際交流団体協議会が、「外国人母子支援のためのネットワーク」を形成しており、ステーキホルダーが集まっていた。 対象:個人 ・子どもへの学習支援はボランティアが担っており、ホームページでの募集や、大学に声をかけての募集を行っている。</p>	<p>【ふれあいサロン】 ・来客者の中で担い手になってくれそうな人に声をかけている。 ・来客者自身が高齢となり、行動範囲が狭まった際、地域内での居場所(ふれあいの場)や、“やること”の必要性を説明すると参画してくれる。(運営スタッフ11人中、3人が元利用者。) ・一人では参画を尻込みする人もいるので、地域内の人間関係を把握し、仲の良い友人同士を誘うことで、参画しやすい雰囲気をつくっている。また、少々強引にでも誘い続け、一回断られてもあきらめない。 ・初心者のスタッフには、場の雰囲気に馴染んでもらうため、まずは簡単な補助業務からやって貰い、負担感等を無くす配慮している。 ・「出来る人が」、「出来る時に」、「出来ることだけ」という基本コンセプトを踏襲し、誰もが無理のない参画ができるようにしている。 【ふれあいこども塾】 ・近畿大学所属の建築学部にする学生が主にボランティア活動をしてきている。 ・担い手の継続に向けて、現在ボランティア活動をしている大学生には、引き続き活動を続けてもらうよう声をかけている。</p>	<p>【担い手(参画者)の確保】 ・PTAに積極的に声をかけるようにしている。 ・PTAなどで活動している若い人を見かけたら、「ヒマになったら(こっちに)来てね」という声かけを実践あれもこれもは大変であるので「できること、できること」から ・「時間ができたら手伝って」が基本拘束するようなことはNGで、用事があるときは行事の日でも休んでもらっている。</p>

●団体の活動が活発化し、連携協働して課題解決に取り組む事例 一覧表

【参考】

事例名	地域における子育ての取組 (鶴見区緑地域)	アクティブラーニング型災害訓練 (平野区瓜破西地域)	マンションの防災訓練 (淀川区新東三国地域)	商店街活性化の取組 (淀川区三津屋地域)	外国にルーツを持つ方を支援する取組 (中央区東心斎橋地域)	ふれあいサロン・ふれあいこども塾 (福島区新家地域)	ふれあいサロン・ふれあいマルシェ (住之江区平林地域)
<p>⑥当事者意識の触発 (どうい活動が当事者意識を触発していくのか)</p>	<p>・課題の共有、情報の共有を丁寧に行い、関係者の共感を得ながら進めていく。 ・課題解決のためには共有した情報をテーブルに乗せて全体が当事者である事を認識する。</p>	<p>[参画団体の当事者意識の触発] ・災害の内容や被害状況を想定し、災害時の行動を検討するという過程を経る。 ・中学生を主体とした防災訓練とすることで、地域の大人の協力が得やすくなる。 [中学生の当事者意識の触発] ・訓練の準備として、まち歩きをする。 ・中学生が普段行かない施設に行ってもらい、いろいろなミッションをこなしてもらい、気付きのきっかけを入れている。(救命講習、マンホールトイレの設置)</p>	<p>【参加者の場合】 ・防災訓練に先立ち、防災訓練の目的や災害時の避難行動について住民自身で考える場を持ち、訓練内容を検討したことで、防災への意識が高まった。</p>	<p>・スタッフにも参加者にも楽しんでもらうこと</p>	<p>【団体】 ・実行委員会形式とし、それぞれの団体の特性を活かした役割分担をした。 【ボランティア】 ・新しいボランティアに向けたガイダンス、継続ボランティアに向けた指導力・意識向上の研修、支援手法に関する研修等を行っている。 ・ボランティアの中でも、趣旨目的を理解し、熱心に活動してくれる人には声をかけて運営側(実行委員会)に加わってもらっている。 ・ボランティアにとっても居場所になっていると思っている。</p>	<p>・毎週、「喫茶ふれあい」開催前には全員でコーヒーの味を確認し、いつも同じ味で提供出来るように確認するとともに、スタッフ間のコミュニケーションの機会を作っている。 ・スタッフのモチベーションを維持するため、サロンで得た利益の中からスタッフ全員でお弁当を食べるなど、楽しい要素を取り入れるよう工夫している。 ・他地域のサロンに対してもモデルケースとして紹介され、見学者が増えた。</p>	<p>・ボランティア活動を労うことが絶対必要。有志で旅行に行ったり、食事に誘ったり。楽しんでもらう工夫が必要で、そうでないと長続きしない。 ・ボランティアを大切にしている。例えば、誕生日にはお祝いするなど。 ・ボランティア活動を労い、ボランティアを大切にすることも、役職者の大切な仕事となっている。</p>
<p>⑦課題解決のための事業 (課題解決のためにどのような事業を実施するか また、そのプロセス)</p>	<p>・学校と地域との関わり方を検討した結果、「児童いきいき放課後事業」を地域が受託することの有効性に気づき、事業を受託した。 ・地域情報が住民に広く広報する必要があるので、広報委員会を立ち上げて、広報誌・HP・ブログ・FBなどの多様なツールを使い、こまめな情報の発信をした。</p>	<p>・災害の内容や被害状況を想定し、災害時の行動を検討のうえ実際に訓練するという手法の防災訓練 ・中学生を主体とした防災訓練</p>	<p>・隣人の状況を理解し合う目的で、日頃からフロア会議を行う。 ・両隣の住民の安否を確認したうえで、避難場所である小学校まで避難するという防災訓練</p>	<p>・音楽祭 ・商店街アーケード下を1日限りの劇場に見立て、その各所で演奏を行い、商店街の北から南へ観客が順番に会場を移動していくという、ユニークなスタイルで実施</p>	<p>・学校の宿題のほか、日本語の基礎的な学習を行う学習支援と、子どもの放課後の居場所づくりを目的とした事業 対象:中央区に在住の外国にルーツを持つ児童、生徒(小学生と本教室卒業生の中学生) ・子どもの支援のためには、親の就労や経済的自立に向けた改善が不可欠。教室を窓口に、親の状況を確認し、家庭環境の改善につなげていく放射状の取組を狙っている。</p>	<p>ふれあいサロン・ふれあいこども塾</p>	<p>ふれあいサロン、ふれあいマルシェ、地域バスの運行</p>
<p>⑧連携協働の契機(触媒) (事例のどのようなプロセスが協働連携を進めさせる重要なチャンス、場づくり、手助けになったりしているのか)</p>	<p>・学校と地域との円卓会議の設定等、意見交換できる場づくりや、SNS等による情報発信・拡散、また、広報紙も町会加入者だけでなく全戸配布するなどして、現状や課題を共有し、共感を得ながら取組を進めた。 また集会や会議などの出欠もメール等で適時に発信できるよう改善して、協働した活動としての認識をえた。</p>	<p>・中学生が訪れる施設になってもらうことによって、多様な主体に防災訓練に参加してもらい、今後の地域防災を考えるうえでの連携が生まれるきっかけにしようとした。</p>	<p>・マンション管理組合の理事長とマンション町会の会長が同じ人で、マンションに合同の自主防災組織を作りたいという熱意があった。 ・防災訓練を通して、実際の災害時にはマンション住民だけで避難するより、地域の災害対策本部等と連携した方が助かる率が高くなることに住民が気が付いた。</p>	<p>・コーディネーターの活躍。タウン誌の編集長がキーパーソンとなり、幅広い人脈から取組に協力してくれる方を集めて、基礎を築いた「みつや交流亭」という交流の場があることで、連携が生まれやすくなっている。</p>	<p>・大阪市立南小学校校長が、協力を求めて働きかけたことが一番のきっかけだと思う。 ・また、同時期に、「外国人母子支援のためのネットワーク」を形成しており、ステークホルダーが集まっていたことで、連携が生まれやすかった。 ・事件により社会の注目が集まったことから、支援の機運が高まり、寄付や協力も得やすかった。</p>	<p>・大関厚生年金住宅は自治会を形成しているため、自治会の集まりの場で話すことができた。 ・マンションの自治会長が「やってみたらいい」と認めてくれた。 ・各種団体に「ふれあいサロン」の取組を幅広く紹介する中で、近畿大学講師が興味を持ち、同大学のゼミ生に話をしたところ学生たちの方から見学したいとの声があがった。</p>	<p>・ふれあいマルシェで野菜を販売する事業者とつながりが得られたのは区役所主催の「企業・NPO・学校・地域交流会」開催(年数回実施)による。 ・会長が事業所経営をしており、地元の企業とつながりがあった。 ・ふれあいサロンには近隣企業に勤務している人も来れるようにしており、受け入れる体制にしている。</p>
<p>⑨リソースシェアリング (必要な資源のシェアリングのためにどのような働きかけを行い、どのような協力の関係ができていくのか(オーバーラップ))</p>	<p>・学校や区役所から、具体的な場所の提供を受けている。</p>	<p>・区役所が中心になって各団体に声をかけた。</p>	<p>・地域の自主防災組織、災害本部と連携して取り組むことで、災害時の被害状況や適切な避難行動等について情報共有ができる。</p>	<p>・初めての取組で、行動様式も考え方も異なる団体と連携しての取組なので、いろいろなアイデアや議論の要素や不安要素は出てくるが、実行委員長やコーディネーターが、話し合いながらとにかく前へ進め、やってみようという方向に持っていった。</p>	<p>・参画団体の性質上、「ソーシャルワーク」の視点と、「学習支援」の視点では、意見が異なる部分もあったが、取組の目的や、めざす効果について、忌憚のない意見交換をし、よく話し合ったうえで、方針や取組を決めていった。 ・場所については、子ども子育てプラザを借りる上で、中央区や中央区社会福祉協議会の協力を、実行委員会の会議、また、中学生の特別教室の場所として、道仁会館を借りる上で、事務局長や町会の方の協力も得ている。</p>	<p>・サロン開催場所や、開催すること自体、また、スタッフへの参画要請等で当初は反発もあったが、反発している人に直接または、反発者の友人から説明等をしてもらうことにより、解決した。 ・ふれあいクラブの中心人物の方が、テーマパークの館内飲食店でのレギュラースタッフの経験があり、カフェのノウハウを持っていた。 ・大学生にとっては、取組に参加することで、自らの学習の一環となり、マンションにとっては、大学生のアイデアや担い手としての参加が得られることとなっている。 ・コーヒーの豆はコスト削減のため仕入業者と交渉。利用者にコーヒー豆購入店を紹介する代わりに、100g350円で購入。また、当初は豆を自家挽きするための機材も無料レンタル提供を受けていた。</p>	<p>・ふれあいマルシェで事業者の商いがうまくいくように、同日に地域のイベント(お祭り等)を行い、地域で人を呼ぶように工夫している。 ・仕入れにあたっては、地産地消を意識している。 ・平林福祉会館が、地域にとって使いやすい会館となるよう、近隣企業も利用可能とするなど、工夫努力をしている。</p>

●団体の活動が活発化し、連携協働して課題解決に取り組む事例 一覧表

【参考】

事例名	地域における子育ての取組 (鶴見区緑地域)	アクティブラーニング型災害訓練 (平野区瓜破西地域)	マンションの防災訓練 (淀川区新東三国地域)	商店街活性化の取組 (淀川区三津屋地域)	外国にルーツを持つ方を支援する取組 (中央区東心斎橋地域)	ふれあいサロン・ふれあいこども塾 (福島区新家地域)	ふれあいサロン・ふれあいマルシェ (住之江区平林地域)
<p>⑩地域協働の手がかり (それぞれの主体がどういうところを手がかりにして今後の地域協働を進めていけばいいのか)</p>	<p>・取組を中心的に行うスタッフがいることで、担い手には自分のできる範囲の中で参画してもらうことができ、過度な負担感を感じることなく参画できる。</p>	<p>・防災をテーマにすると地域や関係機関の共感・協力が得やすい。 ・中学生を主体とした防災訓練とすることで、地域の大人の協力が得やすくなる。 ・アクティブラーニング等の工夫で、楽しく参加できるようになる。 ・参画団体の役割を軽くすると、参加(関わり)のハードルが下がる。</p>	<p>・防災訓練を通して、実際の災害時にはマンション住民だけで避難するより、地域の災害対策本部等と連携した方が助かる率が高くなることに住民が気が付いた。</p>	<p>・三津屋地域には、駅前に大型マンションの建設計画があり、土壌問題や地区計画などの検討のために地域住民が集まって話し合うことが10年以上続いたこともあって、住民の間に、集まって話し合いができる状態ができていた。 ・商店街再生や地域活性化をめざす「みつや交流亭」という、幅広いネットワークを持つ団体が地域に存在したため、多様な団体のコーディネートが生まれやすい。</p>	<p>・外国にルーツを持つ子どもの支援のためには、親の就労や経済的自立に向けた改善が不可欠。教室を窓口に、親の状況を確認し、家庭環境の改善につなげていく放射状の取組を狙っている。</p>	<p>・地域内の人間関係を把握し、仲の良い友人同士を誘うことで、参画しやすい雰囲気をつくっている。 ・ふれあいクラブやふれあいこども塾に参加する住民が顔見知りになることで、住民間で助け合えるきっかけになる。 ・日曜日の一斉清掃活動等に参加した住民に対して、無料コーヒー券を配布し地域住民活動との連携を図っている。更に不定期ではあるが、平日には来れない住民のために年に数回、日曜日の開催を行っている。</p>	<p>「企業・NPO・学校・地域交流会」の場があったことで、普段つながる機会がない企業と出会うことができ、買い物難民という地域課題に協働して取り組むことができた。</p>
<p>⑪協働が成果を生み出す要因 (具体的な協働というのが成果を生み出すことができるようなものかどうやったら生まれてくるのか)</p>	<p>・子どもの健全育成に、学校だけで取り組むのではなく、地域、保護者等のあらゆる関係者が連携して取り組むことで、子どもを見守る層が厚くなり、より効果的なものとなる。子どもを中心としたJr.防災リーダーの養成講座やはぐみ事業での活動を地域連携で実施するなど学校を核とした活動が地域コミュニティの原型であることが住民に認識された。</p>	<p>・訓練の主体である中学生が興味を持つ、楽しいと感じるプログラムを作る(タブレットの活用、訪問施設の選定とそこで体験する内容(ミッション)) ・中学生を訓練者とするので、周りの人をサポートさせたい気持ちにさせている。</p>	<p>・多くの住民の参加を得て防災訓練をすることで、いろいろな工夫や気づきが生み出されている。 ・防災訓練を、マンション住民だけでなく、地域と連携して行うことで、実際の災害時に安全に避難できる可能性が高まる。</p>	<p>・地域、商店街、NPO、自治体労働組合と幅広く連携することで、演奏技術、企画力などのスキルをはじめ、様々な立場からのアイデアを得ることができ、ユニークなスタイルの事業を行うことができた。</p>	<p>・小学校や地域、そして、外国にルーツを持つ子どもや親など、多くの人が課題に感じており、共感があつたので、壁と感じることはなかった。 ・こういった取組は自分たちだけでやるべきでなく、いろいろなセクターと連携して行う必要があるという認識が着手した当初からあつた。 ・一般的にはいってもたつてもいられない想いで自分一人(自団体のみ)でも始めるということがあるのだと思う。しかし、その場合、後から連携に発展させる方が難しいのではないかなと思う。</p>	<p>・大学生の協力を得ることによって事業の幅が広がった。 ・マンションと地域の架け橋事業でノウハウを得ることができた。 ・ふれあいサロンをきっかけに、参加者がやってみたいいろいろなことを気軽に話し合える雰囲気ができ、自治会が主催する百歳体操や映画鑑賞会等、新たな活動の幅が広がった。</p>	<p>地域に企業が多く存在し、企業と協力しあうことが大切という認識のもと、町会だけで活動するのではなく、みんなが一緒になってまちづくりをするという意識で活動をしている。</p>
<p>⑫今後の課題 (今後取組を進めて行くにあたっての課題はなにか 必要なことはなにか)</p>	<p>・取組を中心的に行うスタッフがいることで、担い手には自分のできる範囲の中で参画してもらうことができ、過度な負担感を感じることなく参画できる。 ・地域活動協議会間の連携や情報共有を行うことで、いろいろな課題解決の取組が進むと考える。</p>	<p>・今回は大学の働きかけであるが、地域が主体の防災の取組になっていく必要がある。</p>	<p>・災害対策本部であり、避難場所である小学校を中心とした防災訓練につなげていく際には、小学校下で組織される地域活動協議会とも連携し、連合の11町会とも連携した取り組みになっていくことが大切と考える。 ・小学校と新東三国地域の連携として、災害時に学校にいる子どもを地域の大人に引き渡す防災訓練も始めており、より充実させていきたいと考えている。 ・小学校を中心に取組むことで、町会間の壁がなくなり、地域活動協議会(連合)として一体的になれると直感的に感じている。</p>	<p>・大型マンションが2棟(合計約700戸)、平成29年10月に立ち上がり、新しい住民が加わることになる。 ・今後は、音楽祭の取組においても、新しい住民と地域住民との交流のきっかけとなることを視野に入れていきたい。</p>	<p>・外国にルーツを持つ人への支援のロールモデルになりたいと考えている。 ・運営面でいうと、仕組が一定まわり始め、これからは安定飛行が求められるため、これからの運営が難しいと思っている。 ・なにかやらねばならないという機運の高まりも一定納まったなか、協賛者・支援者も含めたモチベーションの維持に工夫が必要だと思っている。 ・うまくいかなくなった時にも、続けていくために必要な要件とは何かを常に考えながら取り組んでいる。</p>	<p>・マンション外住民のさらなる参加 ・当事者意識を持続させるための、新たな手法の検討 ・広報活動の充実 ・サポートふれあい活動の拡がり</p>	<p>・よりニーズにあった取組に発展させていきたい。 ・市営住宅・UR等をリフォームするなどして、若い人の入居を促進していきたい。 ・災害時等に備えて町会加入を増やしていきたい。</p>